
異世界ラヴェリの召喚士

捺木ナツメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界ラヴェリの召喚士

【Nコード】

N4255V

【作者名】

捺木ナツメ

【あらすじ】

十二歳のときに事故で足が動かなくなって以来、「高槻千里」はゲームオタクの引きこもりだった。そんな彼女がある日目覚めてみると、そこはお気に入りのオンラインゲーム「ラヴェリの神々」の世界で、しかも体は足が動かなくなる前の十二歳に若返っている。さらに偶然通りかかった羊飼いに拾われ、衣食住も確保。しかし、ゲームの中では最強だった千里の「召喚士」の能力も技も全てリセットされていて――？ ※※※主人公最強の、異世界トリップもののファンタジー小説です。

001：目覚めた日（前書き）

乏しい文才ですが頑張りますので、よろしくお願いします。

001..目覚めた日

「……それで、貴女の相談事って何かしら？」

そう問われて、高槻千里たかつきせんりはもう一度自分の置かれている状況を見直した。

目の前に座るのは、北欧風のエスニックな衣装に身を包んだ緑の目の美人。

自分が座っているのは、高原に位置するそこそこ大きいログハウスのテラスに置かれた木製の簡素な机と椅子。

そして。

眼下に広がる雄大な自然。

風に波打つ草原に、遠くには雪を被った山が連っている。

こういう状況に置かれなければ、おそらく一生テレビか写真でしか目にできなかっただろう景色だ。

——だがからこそ、今の自分の状況が異常だということが嫌でもわかる。

「あたしをここに置いて下さい！」

彼女、高槻千里は異世界にトリップした。それもオンラインゲームの世界に、十二歳に若返って。

※※※※※

事の起こりは今朝になる。

珍しく目覚まし時計が鳴る前に目が覚めた千里は、ふかふかの布団の中で、起きようか、それとも目覚ましを鳴るまで布団に包まっていたようか迷っていた。

起きて活動するには家族の手伝いがある。

四年前、十二の時に交通事故で下半身不随となった千里は、自力で布団から車椅子に移ることすら不可能だった。

昨日の晩のオンラインゲームのやりすぎで、体や頭はまだぼうっとする。

家族を起こすのも悪いし、二度寝に突入するか、と布団を体に強く巻き付けたところで、千里は異変に気付いた。

――頭に、太陽の熱を感じる。

遊び盛りの十二で自由を奪われて以来、千里は大半の時間を屋内で過ごしてきた。

外遊びなんて以っての外、登下校も車での送り迎えだし、修学旅行や林間学校もすべて休んだ。もちろん部活も入らず、空いた時間はテレビゲームやオンラインゲームにあててきた。

いわゆる「引きこもり」気味の千里に、これまで体がこんなに温かくなるほど、日光を浴びた経験はなかった。

そういえば、布団もいつもよりふかふかしている。看護に疲れた母はそう頻繁に布団を干さない。

他にも、五感を研ぎ澄ましてみれば、土の匂いやら鳥の鳴き声や

ら、随分と野性的なものが伝わってくる。

もう二度寝どころの騒ぎではなく、千里は眩しさにうっすらと目を開けた。

——もしかして山奥にでも捨てられたか。

まず思ったのはそれだった。

緑溢れる森林に、枝の上で歌う小鳥。

テレビ画面を通してしか見てこなかった景色が、今、目の前に広がっている。

腕を使って上半身を起こすと、その拍子にパサリと布団が肩から落ちた。

いや、布団ではない。

ローブだ。

しかもとってもファンタジックな。

世間一般の基準に照らせば「ゲームオタク」と言われる千里も、コスプレの趣味はない。もちろん、家族にもそれは当て嵌まる。

完全にパニックだ。

車椅子も携帯電話も何一つない。

だから、茂みの影から人が現れたときに、千里は思わず飛び起きて、立ち上がってしまった。

「あのー……大丈夫……？」

何の支えもなしに、自分の二本の足で立っている。

その事実、現れた女性が心配そうに声をかけるほどに、千里を放心させた。

「あ……大丈夫です。大丈夫……」

千里の言葉の後半は、女性の後についてやって来たのであろうヒツジの群によって掻き消された。

十、二十、三十……数えているうちに眠ってしまいそうな群。そのヒツジ達の先頭には、立派な角を持ったかなり大きいヤギが一頭いる。ヤギの背中には荷物のようなものが乗せられていた。

「ああ、ごめんなさいね、驚かせて。大丈夫、ジールは大人しい子だから。私は羊飼いのユステ。貴女……この辺じゃ見ない顔ね」

「ま、まあ……」

おかしい。

周りの木々の植生や、この女性の名前からして、ここは確実に日本ではない。なのに名前も、淡い茶髪に緑目という外見も外国人の彼女が、すらすらと流暢な日本語を喋っている。

自力で立てたことといい、この女性といい、何かがズレている

「あの、すみません。ここってどこですか？」

とにかく先ずは自分かはたしてどこにいるのかを知るために、女性に地名を聞いてみる。

女性——ユステは不思議そうな顔をしたが、すぐに答えてくれた。

「エルヴァステイ大陸のハラリア高原、このラヴェリで一番素敵な土地よ」

それを聞いて、千里は思考が麻痺していくのが分かった。

エルヴァスティ大陸のハラリア高原。

それは昨晚千里がオンラインゲーム「ラヴェリの神々」でログアウトした場所だった。

※※※※※

「ラヴェリの神々」は四年前にサービスが開始されたオンラインゲームだ。

総ID数は百万以上。

その数は実際に活動しているユーザーとは大きく離れてはいるものの、日本有数のMMORPGという事実には変わらない。

その人気の秘密は、自由度の高さにあった。

アバターの種族、職業、装備はもちろんのこと、身長、髪と目の色、体型まで決められる。

また、定期的に種族と職業、装備品、技が追加されたり、新しいダンジョンが加えられたりとプレイヤーを飽きさせることがないとの評判だった。

千里が最後にログインした日も「ラヴェリの神々」始まって以来の大型アップデート「革命」があったばかりだ。

四年前、足が動かなくなってから、千里はそのゲームにのめり込んだ。

アバターの名は「レンリ」。種族はサービス開始当初からある「妖精族」で、職業は「召喚士」だった。

——「だった」というのは、千里は今現在、「レンリ」になって

実際にラヴェリの世界に入っているからで。画面の中のグラフィックでしかなかった世界が、現実のものとなって目の前に広がっていた。

「ハーブティーでいい？ それともヤギのミルク？」

ヤギの背に揺られ、千里が連れて来られた先は、高原の上に立つログハウスだった。

ヤギやヒツジを小屋に戻した後、ユステは千里——この世界ではレンリ——を小屋の中に招いた。

釜戸に火を入れ、シンプルな鉄の鍋で湯を沸かしているあたりがいかにもファンタジーらしい。

（「ラヴェリの神々」は中世ヨーロッパ風の王道ファンタジーがコンセプトだもんな。当たり前か）

ユステは手早くヤギのミルク（先程のジールは雄で、このミルクの提供者は小屋にいた別の雌ヤギ）を手早く温め、木彫りのマグカップに注いでレンリの前に置いた。

「まあ、それでも飲んで落ち着いて。……ああ、それと、着替えも用意した方がいいかもね」

なぜかレンリの着ているローブも靴も、ぶかぶかのものだった。恥ずかしかったが、レンリはぺこりと頭を下げた。

※※※※※

ユステの用意した服は、彼女と同じフェルトで作った簡素な上着

と綿のシャツだった。幾何学的な模様も入っていて、中々にオシャレ。少なくともレンリの部屋着よりは洒落ている。

「さあ、出来たわ。鏡の前に立ってみて」

ユステに背中を押されて、恥ずかしかったが、レンリは鏡を覗き込んだ。

その途端、悲鳴をあげた。

「なっ……なっ……！」

鏡の中に、幼い自分がうつっている。

おそらく十二歳、足が動かなくなった歳の頃だろう。小学校卒業の歳だったので、卒業アルバムでその頃の自分はよく見ている。

ローブがぶかぶかだったのも、そのせいだ。

目線やユステとの身長差で気付かなかったのは、いつも車椅子で行動していたからだった。

訝しげな顔をしているユステを余所に、レンリは頬をつねったり頭を叩いたり

、果ては壁に額を打ち付けたりする。

「……痛い」

頬や額は真っ赤になり、確かに痛い。夢でないということは確かだ。

どうやら自分は、若返って異世界——それもオンラインゲームの世界にトリップしたらしい。

レンリがそう現状を把握し終えたのは、だいぶ後のことだった。

002..トトに会った日

※※※※※

幸い、ユステは何も事情を聞かずにログハウスにレンリの部屋を作ってくれた。条件はユステの仕事を手伝うこと、彼女の言い付けを絶対に守ること。

レンリの記憶によれば、このハラリア高原には「ハイランドウルフ高原狼」というモンスターがいたはずだ。集団で襲ってくるため、中堅プレーヤーでも手強い相手で、初心者ともなれば数と強さに驚いている間に倒され、近くの教会で蘇生される羽目になる。もつとも、レンリのようにサービス開始直後からプレイしている超上級者なら敵ではない。しかし、今のレンリは戦い方も魔法の発動の仕方——もつと言え、魔法が使えるかどうかもわからない。

あのロープはよくよく見ればゲームの中でアバター「レンリ」が着ていたものだった。だが、持っていたはずの杖がない。その状態では魔法も使えないし、万が一ハイランドウルフ高原狼に出くわしたら襲われて食われるだけだ。

ユステもハイランドウルフ高原狼を警戒しているのか、レンリに不用意にログハウスから離れないようにと注意した。

ユステの仕事は羊飼いだ。

主に羊を放牧して毛を刈ったり、毛糸やヤギのチーズを作って麓の町に売りに行くらしい。

放牧にはやはり牧羊犬が必要らしく、ユステはセルトリウという二頭の犬を飼っていて、彼らの世話はレンリの仕事になった。

初日は仕事を覚えるので手一杯で、二日目はセルとリウに散々手を妬かされて、レンリがああローブに引っ掛かっていた便利なアイテムと奇妙な同行者に気付いたのは、ユステと暮らしはじめて三日目のことだった。

※※※※※

その日は「ラヴェリ」と呼ばれるこの世界に来てから、初めて雨が降った日だった。

冷たくしとしとと降る山の雨に、ヒツジを放すことも出来ずに、レンリはユステに暇を出された。ユステ自身はヒツジ達にブラッシングしたり、毛糸で服を作ったりと忙しそうなのだが、レンリに疲れが出てるのが分かったらしい。一日部屋でゆっくり休むようにと言われ、レンリは有り難くそれを実行することにした……のだが、雨に降られてもう二人——いや、もう二匹、暇を持て余しているものがいた。

セルとリウである。

彼らはレンリがパッチワークのベッドの上に伸びているところに、窓から乱入した。

「うわっ!？ 待ちなさい、セル、リウ!」

追い掛けるべき羊がおらず、退屈していた二匹は、レンリを獲物に見立てて遊びはじめる。

堪らずに部屋の隅に逃げたレンリは、思わず近くにあったあのローブで二匹を追いかおうとした。

しかし、ひらひら動くそれに、二匹はかえってヒートアップし、終いにはローブを銜えて引っ張る始末。

二匹があんまり引っ張るものだから、ローブが破けたりしないだろうかと心配したが、魔法的な効果が掛かっているらしく、いくら引っ張られても破れるどころか汚れさえしない。その代わりに、ローブのポケットから何かが落ちた。

——鞆だ。

リウに掠め取られそうになったそれをなんとか奪え返し、二匹にチーズの欠片をやって大人しくさせた後、レンリはベッドに上がって、中身を確かめにかかった。

鞆をひっくり返してみると、中から出てきたのは怪しげな毒々しい色の水薬（おそらくポーション）や金貨のたくさん詰まった革の袋、そして装備品がいくつかと、古びた本や羊皮紙などだった。

出てきた物の体積は、明らかに鞆の容量よりも大きい。なんとなく予想はしていたが、この鞆にも魔法が掛かっている。ゲームで言えばアイテムボックスのような役割なのだろう。物を取り出す前の状態でも、鞆は何も入っていないのかと疑うくらいに軽かった。

もう中身は入っていないかと鞆をひっくり返して振ってみると、丈夫な帆布のような生地で出来た鞆の中で、何かが揺れる感触がする。もしかして中で何か詰まっているのか。何が出てくるのかわからないので、若干ビビりながらも腕を突っ込むと、中は予想以上に広く、レンリの肩まで余裕で入る。

何がつつかえているのか。

手探りで探すと、不意に手に何か柔らかいものが触れた。

思い切って掴むと、それが声を上げた。

「むぎゅっ！」

「……むぎゆ？」

生き物でも入っているのか。
それにしても声が妙に人間っぽい。

意を決して引きずり出すと、それは白いハトのぬいぐるみだった。

「……なんだ、ぬいぐるみか」

さっきのはきつと空耳だろう。頭も胴体もハンドボール大の二頭身、特に可愛くもないぬいぐるみだったので、暇を持て余している二匹にやろうと、それを放ろうとしたそのとき。

「何をするか無礼者！」

——ハトが、ぬいぐるみが、喋った。

「……へ？」

「『……へ？』ではない！ 私を投げようとは何たる無礼かと聞いておるのだっ！」

突然喚き散らしはじめたぬいぐるみに、二匹は怯えて逃げていく。

「しかも私を犬の餌にしようとは……いい度胸だな、センリ！」
「センリ？」

レンリはまだこのぬいぐるみに名乗ってはいない。それに、この世界に来てから「センリ」と名乗った覚えはない。

このハト、何か知っている。

「……何であたしの本名を知ってる？」

喚いていたぬいぐるみの動きが止まる。そして、急に散らばっていた本や羊皮紙を広げて読み始めた。

調子外れな鼻歌を歌っているところが、どう見ても怪しい。

このままでは何も喋りそうにないので、レンリは手を変えて先ずは相手の警戒心を解くことにした。

「あたしはセンリじゃなくて、レンリ。あんたは？」

するとハト。

「貴様なんぞに名乗る名はないわっ！」

それを聞いて、レンリは目的を忘れ、額にピキリと青筋が入る。

「……セル、リウ、おいで」

ハトに驚いて窓の外から様子を伺っていた二匹が、まだぬいぐるみを警戒しながら歩いて来る。レンリはハトをむんずと掴むと、そんな二匹に差し出した。

「これ、あげるから。遊んでいいよ」

「……へ？」

二匹は首を傾げていたが、二、三度鼻でつついて安全なことを確かめると、硬直しているハトを銜える。そして、先程レンリにしたのと同じように、獲物に見立てて振り回しはじめた。

「うわあああつ！　ちよっ……待て待て待て！　センリ、助けてくれっ！」

「センリじゃない。レンリ」

「わ、分かった分かった！　レンリ、こやつらに……なんとか……言え！」

「あともう一つ、あんたのこと、なんて呼べばいい？」

「……名は……ない！　何とでも……呼べ！　だから……早く……止めさせろっ！」

最後の方はハトの息もう絶え絶えで、さすがにレンリにも情が湧く。セルとリウの頭を叩くと、二匹は嫌々だったがハトを放した。

「死ぬかと思ったわ……」

「大袈裟な。ちよっと汚れただけじゃん」

「貴様も誕まみれにされてみろ！」

ハトは唾を飛ばしそうな勢いで怒鳴り散らす。実際にはハトはぬいぐるみだからそれはないが、もしそうだったらレンリも誕まみれになっていただろう。

「風呂はないのか風呂は！」

「ないよ、風呂も洗濯機も」

「センタクキ？　何だそれは……」

「あー……そっか、知らないのか」

「ラヴェリの神々」は中世ヨーロッパ風のファンタジーゲームだ。だからレンリが飛ばされたこのラヴェリには、もちろん洗濯機も炊飯器も冷蔵庫もない。

そして、水道もない。

レンリの仕事の中には、一日三回の水汲みも入っている。その水は飲み水がほとんどで、この世界に来てからレンリは風呂に入っていない。濡らしたタオルで体を拭くだけだ。

「トト、雨上がったら、一緒に近くの川にでも行く？」

「トト？」

「あんたの呼び名。ハトのトト。いいでしょ、これで」

「私をそこの犬と同じような基準で名付けるな！」

「……もう一回セルトリウに遊んでもらう？」

「分かった！ トトでよい。だからあやつらは呼ぶな！」

ぷいとトトが視線を反らす。

その後ろ姿が不思議にいじらしくて、レンリはせめて体を拭いてやろうと、タオルを手に水桶のところに向かった。

レンリが木製のドアを閉めて出て行くと、トトは振り向き、閉まったドアを見て呟いた。

「……そうか、お前はあの頃と何も変わらぬのだな、センリ」

003..お出かけの日

※※※※※

「美味しい！　美味しいぞ、ユステとやら！」

「そう？　それはよかったわ、トトちゃん」

汚い、風呂に入れろと言っていた割には暴れたトトを押さえ付けて、なんとか涎を拭き取った後のこと。

ログハウスの居間に、なぜかユステやレンリと共に昼食をとるトトの姿があった。

事情を話したところ、ユステはすんなりトトをレンリと同じように家族に迎え入れてくれた。

だが、レンリにはそれが気に食わない。トトの態度がレンリとユステでだいぶ違うからだ。

「……あんたぬいぐるみだよ？　なんでご飯を食べるのよ」

「美味しいからに決まっている」

「レンリ、ぬいぐるみに霊が憑くこともあるのよ。いいじゃない、私も美味しいって言ってもらえると嬉しいし」

おっとり微笑むユステを見ると、レンリもトトを攻められなくなる。むしろくしゃした気持ちをどうにかしようと、レンリは芋料理に乱暴にフォークを突き立てた。

※※※※※

「え？ 買い物……ですか？」

「そう。チーズと糸を売って、パンと野菜を買ってきてほしいの」

雨も上がった昼下がり。

レンリはユステから買い物リストを渡された。

ログハウスのある高原は、麓の町から大分離れている。ユステは午後からでもヒツジ達を尾根の向こうまで連れて行くというので、この日の商売兼買い出しはレンリの役目となった。

「いい？ 町の結界に入るまでは、絶対にジールから離れちゃだめよ。高原狼ハイランドウルフに襲われてしまうわ」

「わかりました」

やはり、この高原には高原狼ハイランドウルフが生息しているらしい。もしかしたら地名が同じなだけの「ラヴェリの神々」とは別の異世界かもしれないとレンリは思っていたのだが、その線は薄くなった。

高原狼ハイランドウルフがいるということは、このログハウスの周りにも結界が張ってあるのだろうか。町や都なら、門がその役割を果たしていることが多いが、草原には見渡す限りそんなものはない。ゲームではないわゆる「NPC」だったユステが魔法を使うようには見えないし、他の方法でモンスターを避けているのかもしれない。

「もし高原狼ハイランドウルフに襲われそうになったら、この笛を吹いて。助けに行くから」

そう言って、ユステはレンリの首に、金属製の細い笛をかけた。

ゲームの中では、HPが無くなって死んでも、教会で蘇生されて生き返ることができた。

だが、今は必ず生き返るという保証はない。NPCだったユステ

にはその可能性すらない。

何か合っても、絶対に笛を吹いてはいけない。

レンリは笛を服の内側にしまい、マントを羽織ってジールにまたがった。

※※※※※

「……で、どうして私がお前と出掛けねばならんのだ？」

「いざというときに囧になってもらうから」

「ふざけるなっ！」

ひじ掛け椅子でくつろいでいたトトを捕まえて、レンリは彼（ぬいぐるみなので性別は不明だが、雌っぽくはないので、雄として扱っている）と共にジールの背に乗っていた。

飼い主に似て、おっとりとした彼は、ゆっくりゆっくり山道を下って行く。

雨上がりでしっとりと濡れた高原もまた味わいがある。灌木のベリーや、草の上の雨粒がキラキラと輝いていて、高原全体が光りを放っているかのようだ。

ぼんやりと景色を見ると、不意に視界の尾根に二、三の影が現れた。

ハイランドウルフ

——高原狼だ。

灰色の艶やかな毛並みに、光彩を放つ青い目。一見すると無害で高貴な獣に見えるが、それはとんでもない間違いだ。艶やかに見えるのは魔力を湛えている証拠。青い目もぎらついていて、動くものならなんでも群れで襲って食べてしまう。

今は二、三頭だけで距離も離れているが、初心者のところに散々教会送りにされた経験があるレンリは、服の上から笛をぐっと握った。

「……案ずるな。あんな小物、襲って来ても私が蹴散らしてやる」
肩に乗っていたトトが、羽ではふっとレンリの頭を叩く。

「ぬいぐるみが何言ってるのよ。囹にして逃げちゃうからね？」

「なっ！ 何を小娘！」

「あんただって小バトでしょうが！」

ジールが人間くさいため息をついたことに、背の上で口げんかを始めた二人は気付かない。

ハラリア高原麓の町、バリッシュは、すぐそこに迫っていた。

※※※※※

バリッシュは町というよりも大きな村に近かった。

家々はログハウスよりも粗末な、けれどしっかりと作られた木造で、行き交う人も素朴で良い人に見える。

もちろん道は舗装などされてなく、裸足で駆け回る子供達もいて、とにかく賑やかな町だった。

ジールから下りて、そんなバリッシュの人混みの中を歩いていると、レンリは後ろから声をかけられた。

「あれー？ ユステさんのところのジールだ！ お姉ちゃん、ユステさんのお友達？」

道に立っていたのは、十二歳のレンリよりさらに幼い女の子。おそらく八、九歳だろう。茶髪に茶色の目という町の人と同じ外見は、とても人懐こそうに見える。

「え、えと、その……」

元引きこもりのレンリが答えに窮していると、少女はにこにこしながらレンリの手をとった。

「私はパルミラ！ お姉ちゃんは？」

「レンリ、だけど……」

「レンリ！ 良い名前だね！ ねえ、レンリはユステさんの妹さんなの？」

この世界でのレンリは黒髪で青い目、さらに妖精族特有の尖った耳を持っている。対してユステはベージュの髪に緑の目、そして優しいカーブを描いた耳の持ち主。見れば姉妹でないことはすぐにわかるのだが、答えにつまったレンリはとりあえず頷いた。

「じゃあユステさんの妹さんのレンリは、今日はなんの御用？ チーズと毛糸なら、お母さんのお店で買い取るよ？」

「あ、そうだった。チーズと毛糸を売りに来たんだけど……案内してくれる？」

「うん！」

パルミラは小さな手でレンリの手を引き歩いて行く。

四年間、ほとんど他人と接してこなかったレンリには、それがとても新鮮だった。

※※※※※

パルミラの母、イルミネの店は商店街の中央にあった。

「ようこそ！ お母さんのお店、『雑貨屋 ルミの庭』へ。ほら、入って入って！」

ジールを外の杭に繋いでトトをその上に残し（本人は不本意だったが、「ペット立入禁止」の札が見えたため）、レンリは引きずられるようにして店の中に入る。

少し埃っぽい店内の棚には、牛乳やヤギの乳のビンに、卵、衣類、パンや野菜も並んでいた。ユステに頼まれた買い物は、全てここで済みそうだ。

ジールの背中から丸いチーズと毛糸を下ろして待っていると、奥から店主のイルミネが出てきた。

「おやおや、いらっしやい。ユステの妹だって？　じゃあ安くしくよ」

太くはないががっしりとした体格の、パルミラと同じように人懐こそうな女性。それがイルミネだった。

「いや、その、妹というか厄介になってる者というか……」

「どちらにしろユステの身内だろ？」

「まあ、そんな感じですよ……」

「じゃあ妹みたいなもんだよ。さあ、今日はどのくらい持ってきてくれたんだい？」

イルミネが、にと白い歯を見せて笑う。そして、レンリが机の上に乗せたチーズを秤の上に移し、重さを計っていく。

その彼女の脇ではパルミラが小さな秤で毛糸の重さを調べ、糸の質を紙に書いている。

「うん。良いチーズだ。さすがユステだよ」

「こっちの毛糸もふわふわで丈夫だよ。ユステさん、とってもすごいよね」

「今日はパンと野菜を買うのかい？」

「え、えと……はい、買います……」

「じゃあチーズと毛糸のお金から、野菜とパンのお代を引いとくよ」

いくつかのジャガイモと葉野菜、根菜、そしてパンを袋に詰め込み、レジらしき木箱から銀貨を出してレンリの手押し付けた。

「え？　これだけ……ですか？」

「そうだけど？　何か不満？」

「いえ……」

レンリが提げているあの魔法の鞆には、大量の金貨が詰まった革袋が入っている。だから少々銀貨の量を少なく感じたのだが、よく考えればそうでもない。

「ラヴェリの神々」での金銭の単位は「リン」だった。銅貨一枚で10リン、その銅貨百枚（1千リン）で銀貨一枚、そして銀貨百枚（10万リン）で金貨一枚。公式サイトに出ていた設定では「リン＝円」だったので、銅貨は10円、銀貨は1千円、金貨は10万円になる。

このラヴェリでもそれは同じらしい。

考えてみれば、レンリが今もっている額の方が異常なのだ。

じわっと手に浮かんできた汗を服にこすりつけて拭いながら、レンリは銀貨をユステから預かった財布に押し込んだ。

「そうだ。うちでクッキー焼いたんだよ。ユステにもおすそ分けしたいから、ちよっと待っててくれないかい？」

「あ、はい」

よいしょ、とイルミネがチーズをまとめて持ち上げ、棚に並べてから奥へ向かう。

その彼女とすれ違うように、中年の女性が二人店に入ってきた。

「ユステさんのチーズはね、美味しいからみんな買っていくんだよ。ほら、あそこのお客さんも！」

パルミラが背伸びして、レンリに囁く。

店内は静かだ。

耳を澄ますと、チーズの棚の前で話している女性たちの会話が聞こえてきた。

「まあ、良い匂いのチーズじゃない。一切れ買っていこうかしら」

「止めたいいわよ。それは『ハラリアの魔女』が作ったものだから」

「まあ、あの『魔女』が？」

「そう。あんな恐ろしい狼が出る高原で生きてられるような女よ。チーズに何が入ってるか、分かったもんじゃないわ。チーズなら、ちよっと高いけど他の村から来たの方がマシよ」

ぎゅっと、パルミラがレンリの服の端を掴む。

「……ほんとだね、いつもならね、みんな買ってくんだよ。ほんとだよ」

「うん。分かってる」

窓の外の景色は、再び降ってきた細かい雨によって、光を失っていた。

004：魔導書を読んだ日（前書き）

☆お知らせ☆

お気に入り登録やランキングバナーのクリック、拍手、そしてなにより読んで下さっている皆さま、いつも本当にありがとうございます。大変励みになっております。

先日、下の方に貼っている「Web Clap!」から質問をいただいたので、活動報告にその回答を載せた旨をお知らせに來ました。

今後も、もし拍手からの質問や感想がありましたら活動報告の欄でお返事をさせていただきますと思います。

では、前置きが長くなりましたが、本編をどうぞ。

004..魔導書を読んだ日

※※※※※

イルミネの所で引き止められて雨宿りとお茶をしていたため、レンリがログハウスに戻ったのは結局日が暮れてからだった。

「遅かったわね、お帰りなさい。今日はシチューよ。ジールを小屋に戻してくるから、その間に手を洗って来てね。トトちゃんもよ」

帰りがだいぶ遅れたのに、ユステは何も聞かなかったし、怒りもなかった。もしかしたら、雨が降っていたから雨宿りを予想していたのかもしれない。それでも、お小言をもらうことを恐れていたレンリは、ほっとした。

ラヴェリとレンリがいた世界の料理は酷似しているらしい。

食卓に並んだシチューは、レンリが食べていたものとだいぶ似ていたが、ブロッコリーが入っていなかった。

食後、レンリはログハウスにハイランドウルフ高原狼が近づかない理由をユステに

聞いてみた。

すると、ユステはこう答えた

。

「ああ、簡単よ。この服に描かれている模様が、魔物避けの魔法陣なの」

「魔法陣……ですか？」

ユステの服にもレンリの服にも、同じような幾何学模様が描かれている。

「そんなに力はないけどね」

そう言えば、ログハウスの至るところに同じような模様が彫られている。

ユステがいつも持ち歩いている羊飼いの杖にも立派な宝玉が嵌まっていて、それも魔法の道具なのかと聞くと、魔物避けの魔法陣の力を強めるための物なのだそうだ。

「レンリは魔法と違って興味あるの？」

「ま、まあ……一応は。ユステさんは魔法、使えるんですか？」

「ちょっとだけなら。そうだ、魔導書見てみる？　うちには簡単なのしかないけど」

「え？」

ユステが立ち上がって、本棚から古びた布張りの本を持ってくる。古いが不思議と汚れや染みはなく、触って見ると温かった。

「これが魔導書。とりあえず、一番簡単な初級魔法《物体浮遊》のページを見てみて」

魔導書の表紙をめくると、目に飛び込んで来たのは見たこともない文字だった。英語の筆記体のようなではあるが、それよりもっと複雑で、だかもっと優美な線の群。しかし、じっと見ているうちに、不意にレンリは血管が温かくなるのを感じた。

いや、血管ではない。

——魔力の流れだ。

教えられていないのに、分かる。

血管のように、体中に流れる魔力が、血管以上に具体的に感じられる。腕の内側に出ている青白い血管や、脈打つ心臓に絡み付くように、温かな魔力の管が体中に張り巡らされている。

自分の両腕を見て呆然としているレンリに、ユステが話しかけた。

「それが魔力の活性化。温かいのよ、魔力って。血みたいに。魔力が無くなって来ると、冷たくなっちゃうんだけどね」

さらに、そのまま文字を見つめ続けていると、有り得ないイメージが頭の中に浮かんできた。

——物を浮かす、ということがどういうことか、具体的に手にとるようにわかる。

魔力をどう流し込んだらいいのかとか、その他言葉では言い表せないことが、文字から頭に流れ込んでくる。

これでもレンリは「ラヴェリの神々」で召喚士として最高レベル100に到達したことがある。もしかしたらその力がここでも使えるかもしれないと、多少期待したのだが……

リアル
現実はそのなにごくなかった。

試しに近くにあった毛糸玉を魔導書から流れ込んできたイメージに沿って浮かせようとしたのだが、それはぴくりとも動かない。

ゲームではクリック一つで出来るのに、それが出来ずににひどく

もどかしい。

魔力を流し込み、青色に光る魔法陣が毛糸玉の下に浮かび上がる
ところまではいくのだが、肝心の毛糸玉は浮遊するどころかまったく動かなかった。

散々試した末に、ついにレンリはぐったりと机の上に腕と頭を投げ出した。

「そう簡単にはいかないわよ。でも、レンリは素質はかなりあると思うわ」

「慰めはいりませんよ……」

拗ねた声を出すレンリの頭を、ユステはぽんぽんと叩く。

「たった一度魔導書を見ただけで魔力を活性化させちゃうし、魔法陣が発動しちゃったんだから。何の才能もない人は、一生頑張ったって魔力を感じることもできないのよ。さ、レンリはもう寝なさい。だいぶ遅い時間よ」

ユステは、諭すようにレンリの頭を撫でながら、窓の外に目をやった。

時計は雑貨屋にはあったが、ログハウスはない。ユステはいつも、窓の外の太陽や月、星を見て時間を計っている。

レンリはひじ掛け椅子で寝ていたトトを掴んで、自室に引き上げたが、まだ寝る予定はなかった。

部屋には、魔法の鞆に入っていた魔導書がいくつもある。少し罪悪感はあるものの、このままでは寝ようにも寝られない。

久しぶりに、やる気とか負けず嫌いな精神とか、そういったものに火が点く。

レンリの企みに気がついたのか、ひじ掛け椅子の下で寝ていたセルが頭を持ち上げた。

※※※※※

夜更け。

月が一番高く上った頃に、バリツシュの町に向かってヤギを駆る女の姿があった。

大きなヤギは、馬のように不安定な高原の足場を走って行く。

女は町に着くと、門の外にヤギを繋いで、町中を影のように移動する。

そして、小さな医院の前で足を止め、裏口をノックした。

「……どなたか？」

くぐもった声の中から聞こえる。

「私です」

ドアが開き、その隙間から、ランプを持った初老の町医者が顔を覗かせる。そして、外に立っている女の顔を彼女のフードの隙間から確認すると、ドアを開けて彼女を中に迎え入れた。

「今日は遅かったですな」

「色々あるのよ、私にも」

「で、傷の……いえ、呪いの具合は？」

診察用の椅子に腰掛けた女が、フードを外す。ベージュの髪がフードからこぼれ落ち、薄暗い明かりに緑の目を煌めかせる女の顔が現れた。女はフードだけでなく、さらに上着とその下のシャツも脱ぐ。上半身半裸の姿態が現れるが、体には腕にも胸にも腹にも、包帯が幾重にも巻かれていた。

そして、その包帯では隠しきれない黒い痣のような邪惡な模様が、ところどころに浮かび上がっている。

「……やはり、広がっていますな」

「ええ。相手が相手だったもの」

「それにしても進行が早い。二年でこれほどとは……失礼しますぞ」

町医者が女の腕をとり、包帯を外していく。その下にはいくつもの葉が直接腕に貼られていて、それをとると、途端に鼻につく悪臭が部屋中に広がった。

——葉の下腕の肉は、黒く腐っていた。

葉を外した拍子に、肉がぼろぼろと崩れ落ちる箇所もある。

町医者は表情一つ変えずに腐った肉だけを布で拭い落としていき、その上に軟膏を塗り、新しい葉を貼って、上から包帯を巻いた。

そして、ひとまず腕だけ処置を終えると、女の方に向き直った。

「今はまだ皮膚だけに留まっておりますが、すぐにその下の肉も侵されましょう。やがては全身を蝕んで、骨が剥き出しになるかと」

「どのくらい……私の体はどのくらい持つの？」

「持って二、三年でしょうな。貴女の力を考慮しても」

町医者が意味ありげな顔で女を見たのだが、それを振り払うように女は顔を背けた。

「……買い被らないで。私は所詮、あいつに負けて、今こうなってるのだから」

「何をおっしゃるか!」

ショックを受けたように、穏やかだった町医者が声を荒げる。

「貴女はかつて、エルヴァスティにこの人ありと言われた占星術士^{アストロジスト}ですぞ!」

「……『かつて』だけどね」

「それは……」

町医者は一瞬顔を曇らせて目を伏せたが、またすぐに女の顔を正面から見据えた。

「今、東の地では、彼奴ら——魔族^{きやつ}が力を取り戻しつつあると聞きますぞ。貴女がいなくなってしまうれたら、一体誰がこの国を守るというのですか? 『エルヴァスティの女神』と呼ばれた貴女が」

町医者は、今度は女が答えに詰まるかと思った。女が大陸屈指の実力を持つ人物であることは紛れもない事実。それは彼女自身もよく分かっているはずだ。

だが、女は自信に満ちた笑みを浮かべた。

「いるわ、一人だけ。……あの子が、リーゼとエルが守ったあの子が、三日前に目を覚ましたの」

その答えは、町医者にとって完全に予想外だった。

「何と！ あの方が……？」

「そう。私はあの子に賭ける。だから……だからもう少しだけ私に時間を頂戴」

しばらくは、お互いどちらも言葉を発しなかった。

女と町医者、視線だけでの静かな探り合いが続く。

先にそれに堪えられなくなったのは、町医者だった。

「……わかりました。私が何をしてもあと四年、貴女の命を長らえさせましょう。それができなければ、私はこの仕事を、ハーバリスト薬草使いを辞めます。その代わり、貴女は貴女の全てを、あのお二方が残した少女に託してやって下さい」

「わかったわ。ありがとう」

女が上着を着て、フードを被る。そして立ち上がって戸口に向かったのだが、思い出したように立ち止まり、服の内側から封筒を取り出した。

「私にもしものことがあったら、これをあの子に渡してもらえるかしら」

「……わかりました。お預かりしましょう」

町医者が受け取り、引き出しの奥にしまい込む。そして、それと引き換えるように、薬の瓶と薬草の袋を女に渡した。

最後に、立ち去ろうとした女の背に、町医者呼び掛けた。

「忘れてはなりませんぞ。今、魔族に対抗できるのは、貴女だけです。ユスティーネ様」

005：四年目の日

※※※※※

町医者 of 言ったとおり、女は二年経っても三年経っても死ななかつた。

そうして何事もなく月日が過ぎ、高原に四度目の、約束の夏が廻ってきた。

※※※※※

「レンリ、もっと引っ張って！」

「引っ張ってますってば！ ユステさんこそもっと頑張ってくださいよ！」

「私はもう限界！」

高原のログハウスに併設された小屋の中で、レンリとユステはヤギのお産に立ち会っていた。

いや、立ち会っていたと言うと語弊がある。二人は傍観者というより当事者だった。

まだ暗いうちから陣痛が始まり、今はもう空が白んでいる。

出てきた子ヤギの足に縄を巻き付け、二人はそれを全力で引っ張っていた。

「四年も経って大きくなってんだから、レンリの方が力あるでしょう？。」

「ユステさんだってもう二十七の大人なんですから！」

雌ヤギが一際苦しそうに鳴き、ついにずるりと子ヤギが出てきた。

「出たー！」

「やったわね！」

血と羊水にまみれた子ヤギを、母ヤギが舐めている。レンリも床に敷いてある藁でそれを拭う。

「……やっと終わったか。さあ、飯だ飯だ！ 者ども、飯にするぞ！」

四年経っても唯一変わらないトトが柵の上から落りて、一人ログハウスに向かって行った。

※※※※※

「ユステさん、あの子ヤギの名前、テンっていうのはどうですか？」
「テン？　なんで？」

二人ともヤギの血と羊水まみれだったので、体を拭いて服を着替えたあとに、食卓についていた。

「いや、その、背中に黒い点があったので……」
「お前はまた、犬なんぞと同じ基準で名付けおって！　ここはアイシシュタインとかモーツァルトと名付けようではないか！」

トトの言う「アイシシュタインとかモーツァルト」というのが、果してレンリのいた世界の有名な二人かはわからない。しかし、こ

の四年間で、元の世界を思い出させるようなことは度々あった。だからといって、レンリが郷愁の念に駆られたり、ホームシックになったかといえ、それはない。

千里と違い、レンリは足が動く。

トリップする前と同じ年齢になった今、そのことが今までよりもいっそう強く感じる。

「さすがにその名前はないでしょ……。テンの方がずっといいわよ」
「じゃあ、テンで決まりということ。今日はあたしがテン達を小川まで連れていきますけど、ユステさんもついでに水浴びしませんか？」

「あ……私はいいわ。今日は別の仕事を片付けちゃうから。さ、食べ終わったら仕事仕事！」

※※※※※

ヤギやウマなど、草食動物は生まれてから立ち上がるのが早いというが、テンが立ち上がるまでの時間は相当に早かった。レンリが朝食を終え、簡単な昼食を用意して小屋に向かうと、既に立ち上がってぐいぐいと母ヤギの乳を飲んでるほどだった。

尾根の向こうまで行くときは、レンリはいつもマントと昼食、そして木を削っただけの素朴な杖と、ユステにもらった金属の笛を持って行く。それは四年間ずっと変わることのない習慣だったが、最近になって少し変わったことがあった。

杖が、宝玉の嵌まった魔法専用の杖ロッドに代わったのだ。もちろん、ユステが持っているような立派な杖ではなく、宝玉も小石ほどこ

ない。しかし、ただの木の杖と違って魔法が使える。

「ラヴェリの神々」では、魔法系の職業は杖を装備しないと技スキルを使うことができなかった。それはこのラヴェリでもほぼ同じで、ごく簡単な初級魔法以外は宝玉が嵌ロッドまった杖がないと発動させることができない。

つまり、レンリも宝玉付きの杖ロッドがないと発動できない、中級レベルの魔法をこの四年間で覚えたのだ。

レンリの成長ぶりは、教えたユステが目を見張るほどだった。特に召喚系の魔法はログハウスにあった魔導書の魔法を物足りなく感じるほど著しい成長を見せ、ユステはレンリを国の内部にある魔法学園に入学させることを考えはじめていた。

もしかして「ラヴェリの神々」で最強だった召喚士サモナーのことと何か関係しているのかと思ったが、比較対象がいないと何とも言えない。

はたして自分以外にもこの世界にトリップした人がいるのか。
ジールの背に揺られて高原を歩く間、最近レンリが考えていることといえば、大抵がそのことだった。

もしいるなら、話してみたい。

一緒に元の世界に帰る方法を探したいし、何より心強い。

いくら足が動くとはいえ、レンリがまったく故郷を懐かしまないかといえば、それは嘘になる。

育った高原を出るのは嫌だったが、それ以上に仲間を探してみたい。だからユステが言うように魔法学園に入学するのもいいかもし

れない、レンリはそう考えていた。

だが、高原を出るにはあまりにもレンリは無知だった。

「ラヴェリの神々」で得た知識から言うと、このハラリア高原は大陸に三つある国家のうち、一番東の王国の北西部に位置していたはずだ。しかし、まだ「ラヴェリの神々」とこのラヴェリがまったく同じだという確証は得られていない。固有名詞や魔法の技が全く同じことから、多分二つの世界は同じものなんだろうなとは予想しているが、今の状態でそうと断定して行動するのは軽率過ぎる。

ユステは滅多に外の世界の話をしないうし、テレビも新聞もインターネットもないこの世界で情報を得るのは至難の技だ。

帰ったら、ユステに高原を出て魔法学園に入学したいと思っていることを相談しよう。

レンリはそう決心して、ヤギ達（ヒツジは今日はログハウス周辺でユステが放牧）をセルとリウと共に引き連れて歩きはじめた。

その時が永遠に来ないことを、まだ知らないで。

※※※※※

レンリが放牧に行くとき、トトはいつもジールの頭の上に乗ってついて来た。この謎が多い（というより存在自体が謎な）ハトのぬいぐるみは、結局この四年間、自らのことを何もレンリにしゃべっていない。レンリもレンリで、いつもなんとなくやり過ぎされて来たため、何故トトが「センリ」の名を知っていたのかとか、何故ぬいぐるみが動いているのかとか、もう深く追求する気はなくなっていた。

「そういえばさあ、あたしユステさんと一緒に川に来たことないんだけど……」

「お前、ユステに嫌われてるんじゃないのか？」

「なんであんたはそう言いにくいことをズバっと言うかなあ……遠慮とか配慮とか無いわけ？」

「無い」

「あ、そ……」

傍から見ればこういうのを「気おけない友達」とでも言うのだろうか、この二人（一人と一羽）にその自覚はない。レンリはトトのことを「ペット」と思っているし、トトはトトでレンリのことを「お守りが必要な子供」と思っているような節がある。

そうこうしているうちに、いつもヤギを放している尾根に着き、後はセルとリウに任せて、レンリは草地に腰を下ろして魔導書を広げた。

「勉強か？ お前、昨日の夜も寝るのが遅かっただろう。やけに熱心だな」

「まあね。面白いんだもん」

ゲームではレベルが上がれば勝手に習得していった魔法だが、ここでは魔導書を読んで勉強しなければならない。勉強といっても、文字を眺めていれば勝手に魔法のイメージが頭の中に流れ込んで来るのだが。

今読んでいるのは、召喚系の魔法——召喚術を集めた魔導書。辛うじて中級者と言えるレンリはまだ大型の魔物を召喚することは当然できず、出てくるのはネズミとかウサギで、トトに羽で小突かれただけでぱっと消えてしまうような儚いものばかりだった。

それでも魔法を使うのが面白くて、レンリは持ってきた昼食を食べるのも忘れて、魔導書を読み耽った。

だから、気が付かなかった。

「おい、テンが消えているぞ」

「え……？」

生まれたばかりの子ヤギがいない。

そういえば先程からヤギの群が騒がしい。母ヤギだけでなく、群全体が子ヤギを探している。

「しまった……！」

この高原には集団戦法が得意な高原狼ハイランドウルフしかでないが、必ずしも彼らは群でしか攻撃しないという訳ではない。ゲームの中では初心者ハイランドウルフが一人でうろついていると、単体でも襲って来たことがあった。同様に、群からはぐれた子ヤギなら掠め取られかねない。

直に日が暮れ、夜目がきく高原狼ハイランドウルフが活発に動き回る時間になる。

「探さなきゃ！ トト、あんたは向こうを見てきて！ あたしは小川の方を見に行くから！」

「分かった！ お前も十分に気を付……」

トトが何と言ったかは、最後まで聞き取れなかった。

突然高原に響き渡った獣の咆哮。

それはトトの声を掻き消し、吠えるセルとリウの声を掻き消し
我が子を探して鳴く母やギの声を掻き消す。

山の縁から突如現れたそれは、当然ハイランドウルフ高原狼ではなかった。

「何で……何でこんな所にワイバーンが……」

現れたのは、上級者でも手こずる魔物だった。それも、本来群れないそれが、何十頭も隊列を組んで、眼下にいる絶好の白い獲物目掛けて飛んで来ている。

それも、先頭の一頭は口に白くて小さな何かを銜えながら。

006：星が降った日

※※※※※

「ワイバーン」や「ワーム」、「ズメイ」など、ドラゴン系の魔^{モン}物^{スタ}は基本的には群れない。ドラゴンの好物はドラゴンだから、群れる間もなく共食いを始めるからだ。

——「ラヴェリの神々」の公式サイトには、確かにそう書いてあったはずだった。

落ちて行く夕陽とは逆の方向から飛んで来るワイバーンの群。夜の帳を背景に隊列を組んでいる彼らの姿は、どこか幻想的で、信じがたい光景だった。

「レンリ、何を突っ立っている！？ 逃げるぞ！」

ジールの頭に乗っているトトが叫ぶ。

「でも、まだテンが……」

「いい加減に気付け！ あいつはもうワイバーンに食われた！」

——食われた。

生々しい現実が、急に蘇る。

途端に足から力が抜け、レンリは草地に座り込む。真っ赤な夕陽の光を受け、青いワイバーンが血に染まっているように見える。

「レンリ！
ハイランドウルフ
高原狼だ！」

トトの声に地にも目をやると、目を赤く光らせて、ハイランドウルフ高原狼の群が闇の中から迫って来るところだった。

十、二十、いや、百頭は軽く超えている。

ヤギ達はパニックに陥り散り散りに逃げ出す。

レンリも逃げようとするのだが、足に力が入らない。

「レンリ！」

ハイランドウルフ高原狼が迫る。

そして――

ハイランドウルフ高原狼達は、突如現れた広範囲を覆う障壁バリアに激突し、灰になって消えた。

※※※※※

「ついに来たのね……」

ログハウスを中心に組んだ魔法陣が敵の侵入に反応して、障壁バリアが高原の夜空に広がっている。

ユステは羊飼いの杖――いや、アストロジスト占星術士の杖をとった。

「天よ、私の求めに応じ、我が敵に裁きを下し給え。我、天の御子にして星を敬いし占星術士なり……」

杖を中心^{ロッド}に、光る緑の巨大な魔法陣が広がっていく。

「……星よ、月よ、天よ。我が願い、聞き入れ給え！　《流星の裁き》！」

魔法陣が強い光を放つ。天まで届くようなその光はすぐに消えたが、代わりにさらに強い光を発する塊——星が降ってきた。

※※※※※

「何をしている、レンリ、逃げろ！」

輝く障壁は高原狼^{ハイランドウルフ}を通さない。

しかし、獲物を前にしてもどかしさを覚えるワイバーンの群は別だった。

彼らが強敵と恐れられる所以は、彼らの攻撃の仕方にある。

途方もなく巨大なドーム状の障壁目掛けて、ワイバーン達は一斉に炎を吐いた。

一カ所に力を集めるならまだしも、この障壁はかなり広範囲に力を分散させている。

もちろん、そう長く持ちこたえられるはずもなく、熱に溶かされるように徐々に障壁は崩れていった。

と、そこへ今度は天から何かが降って来る。

——星だ。

隕石のように、大量の星が降ってきて、次々にワイバーンを撃ち落とす。それは地上にいる高原狼も例外ではなく、もちろん、レンリ達も例外でない。

慌てて障壁の穴の空いていない部分に逃げるのだが、それを考えたのはレンリだけではなかった。

障壁の崩れ落ちた部分から、ワイバーンが内側に入ってきたのだ。

「レンリ！」

前足が翼になっている竜は、次々に中に入ってきて炎を撒き散らす。

ワイバーンやドラゴン系の魔物の火は、消えにくく広がりやすい。

高原は、あっという間に火の海になった。夜空が炎で赤く染まるほどに。

早く知らせないと、ログハウスどころかバリッシュの町も炎に包まれることになる。

他のヤギがパニックになってどこかに行ってしまった中、ジールだけがレンリを待っていた。彼に乗ってとりあえずログハウスに向かおうと思うのだが、レンリの足はやはり動かない。

却ってその不自然な動きがワイバーンの注意を引き付け、一頭が地面を二つの翼についている前足で這って、レンリの背に迫った。

「レンリ、後ろだ！」

トトが叫ぶ。

「——っ！」

とっさに近くに転がっていた杖^{ロッド}を掴み、盾を召喚する。

青い魔法陣から出てきた畳ほどの盾は、奇跡的に一度はワイバーンの炎に耐えたが、二度目の攻撃で障壁と同じように溶けはじめる。それでもなお、盾の形状を保とうと、レンリは全力でそれに魔力を注ぎ込む。

盾が壊れたら、炎は間違いなくレンリを直撃する。

しかし、その攻撃に最も早く耐え切れなくなったのは、盾でもレンリでもなく。

杖^{ロッド}についている宝玉だった。

魔法を使うと輝く宝玉だが、すでに今までに無いほどの強い光を放っていたそれは、何の前触れもなく砕け散った。

「あっ……」

一瞬で盾も溶け去り、炎が目前に迫る。

不思議にそれはスローモーションのようにゆっくりと近づいてきて、目をつぶって顔を両腕でかばったレンリの覚悟も決まった。

四年。

長いようで短かった四年。

その全てのことが——トトやセル、リウ、パルミラにイルミネ、そしてユステのことが——刹那と呼ばれる時間で脳裏を駆け抜けて行く。

だが。

炎の熱は、いつまでたってもレンリを襲わなかった。

代わりに聞こえてきたのは、ワイバーンの断末魔の悲鳴。

恐る恐る目を開けると、そこにいたのはワイバーンでも炎でもなく。

純白の大きな鳥の背中だった。

「え……？」

真っ白な、それ自体が光を放っているかのような美しい鳥は、翼を広げてレンリをかばうように立っている。

そして、その鳥の目の前に、焼け焦げたワイバーンの死体。

状況から見ておそらくこの鳥がやったのだろうが、何をどうしたらワイバーンのあの強力な鱗が焼け焦げるのか、検討もつかない。

けれども、その謎はすぐに解けた。

仲間の死に激怒したのか、集まって威嚇し始めたワイバーン目掛けて、その鳥が口から白い光のような、高温の炎を吐いたのだ。

余りにも高温過ぎたせいで、炎は草地に燃え移ることはない。

白い炎を浴びて動かなくなった仲間を見て、残ったワイバーンや
ハイランドウルフ
高原狼は、鳥の前から逃げ出していく。

敵を完全に蹴散らした後、白い鳥は振り返って、青い目でじつと
レンリを見た。

「呆けている場合か、行くぞ、レンリ」

「……はい？」

鳥の嘴から出たのは、紛れもないトトの声。

離れたところに立っているジールの頭の上を確認すると、そこに
トトの姿はない。

「えーと……その……トト、様……であらせられたりするんですか
……？」

「何だそのおかしな敬語は。気色悪い」

不機嫌そうに鳥が眉間（と思しき目の間）に皺を寄せる。ずいぶ
んと表情豊かな鳥だ。

「いや、その、何て言うか……うーん……」

「……私にこの姿は似合わないけども？」

「そう！」

「ふざけるなっ！」

ワイバーンよりは遥かに小さいが、それでもレンリの背丈は優に
超える純白の美しい鳥。それが今のトトだった。

「……っていうか、なんでそんなに立派な姿？ 成長期？」

「違うわ！ 私の元の姿これだ！ ……昔、死にかけたことがあって、魂だけあのぬいぐるみに逃げ込んだ」

ユステの「ぬいぐるみに霊がとり憑いた」説は満更外れていなかったらしい。

だが、まだ腑に落ちないことがある。

「で、なんでその姿に戻ってるのよ？」

「一時的にこの姿に化けている。何かと都合の良い姿だし、力も解放しやすいからな」

「化けるって……妖怪ですか？」

「ヨウカイ？ 何だそれは」

いくら「ラヴェリの神々」に酷似していて、日本語も通じる世界だからと言って、さすがに日本文化は通用しないらしい。

炎に包まれた草原であっても、少し和んだ空気が流れたのだが、急にトトの表情が真剣になった。

「それより……こんな所で油を売っていていいのか。私がさっき蹴散らした輩は、今頃バリッシュやユステの下へ向かっているかも知れんぞ」

「あ……」

「どうする、助けに向かうか？ それとも、逃げるか？」

見渡す限り、余程トトを恐れたのか、魔物の類は一匹も見当たらない。今逃げれば確実に逃げ切れるだろう。

しかし、そんなことで、ユステ達を見捨てられるわけがなかった。

「もちろん、助けに行くよ！」

「……分かった。私の背に乗れ」

「ほんと？ いいの？」

プライドだけは妙に高いトトのこと。背に乗るなんて絶対に許さない、お前は走っていけ、とでも言うかと思いきや、トトはレンリに背を向けた。

「……今日だけだぞ。特別に許してやる」

やけに「特別に」に力が籠っている。

「それと……私がお前ごときを乗せたなどと、言い触らすなよ」

「分かってるって」

レンリを背に乗せ、怯えて固まっているジールを足に掴むと、トトは真っ赤な夜空に舞い上がった。

007：別れの日

※※※※※

「ラヴェリの神々」に登場する魔物モンスターは、他のオンラインゲームでは見ない仕様になっていることが多かった。

ハイランドウルフ 高原狼などはその典型で、これは運営側が作ったオリジナルの魔物。他にも、本来青い魔物を赤くしたり、赤い魔物を白くしたりと、他所との差別化を図ろうとした結果、「ラヴェリの神々」の魔物は大変バラエティにとんだものになっている。

レンリの覚えていた限りでは、不死鳥フェニックスも赤ではなく白かったのだが。

「……ねえ、トトって何て言う魔物なの？」

「ん？ 見たらわかるだろう。不死鳥だ」

「なんであんな姿だったわけ？」

「だから言っただろう！ 一度死にかけたんだ。不死鳥と言えど、寿命がないだけで、殺されれば死ぬ。だから、魂だけ一時的にあのぬいぐるみに避難した」

二人は呑気に会話しているように見えるが、トトが飛んでいるのは星が落ちて来る燃え盛る草原の上。流星の威力に障壁もとつくに消えている。上からも下からもすごい熱気と煙で、レンリは鼻や口を袖で覆っていた。

「見えた、ログハウスだ！ ユステもいるぞ！」

エルフ 妖精族の特徴には遠目が利くというのがある。実際、この世界に

来てからレンリもかなり視力が良くなり、まだ相当距離があるログハウスのこともはっきり見えた。

「ユステさん！」

灼熱の流星はもちろんログハウスにも降り注いでいる。だが、ログハウスの周りには奇妙な障壁が張られていて、それをワイバーンが取り囲んでいた。

「トト！」

「分かっている！」

草原のまだ火が回っていない部分にジールを下ろすと、トトは凄まじいスピードで飛んで、ワイバーンの一頭に足でつかみ掛かった。猛禽系の鳥の最大の武器は嘴ではなく足だと言われるように、トトは足でワイバーンの目を潰し、狂乱状態になったそれを白い炎で瞬殺した。

「レンリ、ユステの下へ行け！」

「分かった！」

一旦地面に下りてレンリを地面に下ろし、トトは再び空に舞い上がる。それを追って幾多のワイバーン達が飛び上がった。

「ユステさん、大丈夫ですか！？」

「ええ」

レンリが近づくと障壁は消え、ジールもログハウスの中に入ることができた。

中には先に避難していたセルとリウもいて、リウの方は尾の先が焼け焦げている。

そして、ユステはというと。

見たことがない若葉色のローブを着て、羊飼いの杖を持って魔法陣の中心に立っていた。

「あの……その恰好……」

普段着ている柔らかなフェルトの上着ではなく、光沢のある若葉色のローブ。おそらくその光沢は魔法によるものだ。

ローブと杖だけ出なく、普段はしていなかったイヤリングも耳に付けていたり、髪を結い上げていたり、別人のような出で立ちだった。

「……レンリ、よく聞いて」

ユステが杖を置いて、レンリの両肩に手を置く。そのただならぬ雰囲気にもまれ、レンリは固まった。

「今まで黙っていたのは悪かったと思ってる。でもね、我慢して聞いてね」

「はい……?」

ログハウスを包む障壁にはワイバーンが群がっていて、よほどの話でなければしているような状況ではない。

だが、ユステは焦りもせず、レンリの顔を正面から見つめた。

「あなたは……自分のこと、何者だか知ってる?」

「え? ああ、その……」

まさか「異世界からやってきたゲームオタクの引きこもりです」
とも言えない。

しかし、最初から答えは期待していなかったのか、ユステは答えを待たずに続ける。

彼女が次に言った言葉が、衝撃だった。

「あなたは、二年前この世界を救った英雄なの」

ぽかんと佇むレンリに、畳み掛けるようにユステが言葉を次ぐ。

「このエルヴァステイ大陸の東側にはね、ハルヴァラという島があるの。そこに十六年前、突如『魔族』^{アンデット}っていう種族が現れたの。魔族はね、大量の死霊系の魔物を従えてて、何の理由もなく人々を殺すの。そこに六年前、突然現れて世界を救ったのが、十歳の天才召喚士があなただったの、レンリ」

「ちょ、ちょっと待ってください！ でも、仮にそうだったとして、あたし……十六年もこの世界にいたんですか……？」

「え？ ええ、そうだけど？」

怪訝そうな顔をしてユステが頷く。

レンリがこの世界にトリップしたと思ったのは四年前の話。それ以前から、というより年齢でいうと0歳からこの世界にいたとばれば、それはトリップではなく転生になる。

では何故記憶がないのか。十二年分も、それも転生前の記憶が無事な状態で、何故記憶がきれいに途切れているのか。

ユステはさらに続ける。

「あなたは六年前、『終末の戦い』と呼ばれる魔族との決戦で、わずか十歳で魔族を倒した英雄なの。でも、魔族とやりあったら無事では済まない。もちろん、あなただけじゃなくて国も騎士団や名のあるギルドを派遣したけど、とてもじゃないけど普通の人族や妖精族、獣人族なんかじゃ、魔族に太刀打ちできないわ」

「え？　でも、あたしだって妖精族エルフですよ……？」

尖った耳は妖精族のなよりの証拠。

レンリは髪をかきあげて耳を見せるが、ユステは首を横に振った。そういうことではないらしい。

「十六年前、魔族が現れたと同時にね、大陸各地で『神の落とし子』と呼ばれる特別な子供達が各地で生まれたのよ。人族にも、獣人族にも、そしてもちろん妖精族にも。右肩に特別な痣を持っていたね。その一人があなたなの、レンリ」

ユステがレンリの服の袖（夏なので半袖）をめくり、肩を出させる。

そこには不思議な形の小さな痣があった。

四年も暮らして何故気づかなかったかといえば、この地方には肩を露出するような服飾文化が無かったのと、案外肩の痣というのは見えにくいものだからだろう。肩を捻らないと自分で痣は見えないし、無意識で発見できるようなものではない。

「『神の落とし子』は生まれながらに強力な魔力を備えていてね。それに、前世の記憶がある子もいたらしく、魔族への対抗手段として喜ばれたのよ」

「前世の……記憶？」

間違いない。

自分以外にも、トリップした人はいる。

レンリはそう確信したが、それよりも今はユステの話の方が重要だった。

「今のあなたはレンリって名乗ってるけど、六年前まではセンリって名乗ってた。トトという名の不死鳥も連れていて、『エルヴァスティの救世主』と呼ばれてたほどの。そんなあなたでも、魔族を倒すには相打ち覚悟しかなかった。そして実際、あなたはほとんど死にかけてらしいの」

「死にかけた……」

だが、レンリはこうして生きている。四年前に目覚めたときも、別段怪我をしているわけでも無かった。

それより気になるのは、何故ユステがこんなに事情を詳しく知っているのかということ。

（もし、あたしの推測が正しければ……）

「ユステさん、もしかして、あなたもその六年前の『終末の戦い』に参加したんじゃないですか？」

「えっ……」

今度はユステが驚く番だった。

「だって……そんなに力のありそうなローブと杖を持ってるってことは、ユステさんだって強かったんじゃないんですか？」

レンリの記憶によると、ユステが持っているのはアストロジスト占星術士のローブと杖。それも魔法効果が目に見えるような光沢となって現れるローブと、レンリの握りこぶしよりも大きな宝玉がついた杖だ。「ラヴェリの神々」での予備知識がなくてもわかっただろう。

「……鋭いわね」

「やっぱり」

数多くのワイバーンの炎をも防ぐ障壁を張る実力の持ち主だ。そのくらい、不思議ではない。

「私もあの戦いに参加したわ。リーゼとエルっていう親友二人とね。そして、私とエルは生き残った。でも、リーゼは……」

ユステの表情が曇る。

しかし、暗い表情を吹き飛ばすと、彼女はレンリの目をしっかりと見据えた。

「リーゼは、あなたを守って死んだの」

「……え？」

「正確に言えば、死にかけたあなたを救おうとして。彼女だけでなくエルもあなたの存命に尽力したらしけど、私はそのころ王都で戦ってたから……詳しくは知らないの。でも、リーゼとエルがあなたとともにハルヴァラに乗り込んで行ったのは確か。……どう？何か覚えてない？」

リーゼとエル。どこか懐かしい響きの名前だが、どんなに頑張っても思い出せるのは部屋に引きこもっていた下半身不随の「高槻千里」のみ。

レンリが否定すると、ユステは少し寂しそうな顔をした。

「どうやってかは知らないけど、あの二人はとにかくあなたを死なせなかった。代償として、あなたは深い眠りに落ちたみたいだけだね。二年もの、長い長い眠りに。きつとその間に、ゆっくり魔力や生命力を回復していたんでしょうけど。記憶が消えているのもそのときの衝撃のせいみたい」

「でも……どうして……あたしなんかを？ 魔族は、倒したんじゃないんですか？」

「いいえ。障壁の外を見てみなさい」

障壁の外には、相変わらずワイバーンの群。トトが十数頭を引き付けているが、まだ何十頭もが障壁を取り囲んでいる。

その目はみんな一様に赤く輝いていた。

「目が赤いのは魔族の手下の死霊系アンデットの魔物の証拠。ハイランドウルフ高原狼だって目が赤かったでしょ？」

「そういえば……」

普段は青い目が、赤くぎらついていたのを思い出す。

「魔族は壊滅状態に追いやられただけ。『終末の戦い』から六年経って、あなたもこんなに元気になったけど、魔族も力を取り戻している。だからあの二人は、あなたを全力で生かそうとしたの。命を落としてでも。魔族と対等に渡り合えたのは、後にも先にもあなただけでしょから」

「そんな……！」

ユステが暗に「魔族を倒せ」と言っているのはレンリでもわかる。

「私は占星術士。アストロジストあの戦いから二年後、あなたがあの場所で目覚め

るのは星占いでわかっていた。だから、この場所にログハウスを建てて、あなたが目覚めるのをずっと待っていたの。あの二人が命を賭けてまで守ろうとした希望は、私が守る。そう決めたもの」

最後の一言は、もはやレンリに言われているものではなくて。

ユステが杖を持って立ち上がる。

外に足に向けたところを見ると、彼女が何をしようとしているのかは、明白だった。

「待ってください！ 無理です！ あたしだけで魔族を倒すなんて……そんなの絶対無理です！」

必死に呼び掛けるが、ユステの決心は変わらない。

その代わりに歩みを止めて振り返ると、こう言った。

「ごめんね。私にはもう、どのみち時間がないの。六年前の戦いで呪いを受けちゃって。体が持たないのよ」

ローブの裾をめくると、そこには包帯を巻いた痛々しい腕が現れる。包帯では隠しきれないほど腐食部分が広がっていて、見るも無惨な状態だった。

「でも……でも、あたし、魔法も使えなくて、この世界のこと何も知らなくて……」

「大丈夫。魔法は使い方を忘れているだけだから、あなたには十分素質があるわ。リーゼとエルの判断を信じて」

ユステは耳のイヤリングを取ると、それをレンリに放って寄越した。

「持ってて。私の代わりに、あなたを守ってくれるように」

「ユステさん！」

「……ユステじゃないわ。私の名前は……本当の名前は、ユスティーネ。黙っててごめんね」

ユステが泡の膜のように、障壁を通り抜ける。レンリもそれを追ったのだが、今度は障壁は頑として彼女を通さなかった。

「ごめんね……レンリ」

ユステが杖を掲げると、ワイバーンと戦っていたトトが何かに引っ張られたかのように落ちてきて、ぬいぐるみの姿に戻って障壁の中に落下する。

敵を見失った怒り心頭のワイバーンの注意は当然ユステに向くわけ。

何十頭というワイバーンが彼女に襲い掛かる。

「リーゼ、私も今行くわ」

ユステが杖を空に掲げる。

すると、星と星を繋いだような途方もなく大きい魔法陣が夜空に現れ、そこから光が降り注ぎ、全てを焼き尽くした。

草原も、ワイバーンも、そしてユステも。

障壁が消えたのは、光が消えてからだいぶ経ってからのことだった。

あの光の中、ただ一つ残ったユステの杖を抱きしめて、焼け焦げて黒くなった草原の上で、レンリは夜明けまで泣いた。

008：泣いた日（前書き）

☆お詫びとお知らせ☆

いつもお読みいただきありがとうございます。

昨日投稿分の「007：別れの日」を、投稿後に再度推敲した結果、多数の問題が見つかったので、本日（8月8日23時25分頃）7話の大幅訂正版を投稿しました。

そちらを先に読まないで、おそらく本日投稿分のこの8話を読んで意味が通じないかと思います。

お手数をおかけしてすみませんが、上記の時刻より前に7話を読まれた方は、もう一度そちらをお読み下さい。

（お気に入り登録がついに30件を超えました！ 登録して下さいった皆さん、そうでなくてもここまで読んで下さった皆さん、本当にありがとうございます！ 今後このようなことがないよう、十分気をつけます……。）

008..泣いた日

※※※※※

すぐそばに、若葉色のワンピースを着たユステがいる。見慣れぬその服装に不安を覚えたレンリは、彼女の服の袖を掴もうとするが、何故か服に触ることができない。

そうしているうちに、ユステはどこかへ歩いていってしまう。

何とか彼女に追いつきたくて走ろうとするのだが、足が動かない。

「ユステさんっ!」

——手を伸ばした先は、見慣れぬ天井だった。

「あ……」

ログハウスの天井でもなく、元の世界の自室の天井でもない。レンリが寝ているベッドも、ログハウスのパッチワーク柄ではなく、病院のような真っ白なシーツのものだ。伸ばした手には包帯やガーゼが貼られている。

「起きましたかな?」

周囲を見回して、どこだろうと思案していると、木戸から初老の男性が入ってきた。手には木箱を抱えている。

「あの……」

「私ですかね？ 私はこのバリツシュのしがない町医者ですぞ。そして貴女は患者。大人しくして下さいよ？」

――患者。

その一言で、何が起きたのか鮮明に蘇ってくる。

と、丁度その時ドアが乱暴に開いて、トトが中に飛び込んできた。

「おいこら、ヤブ医者！ 貴様レンリをどこに……」

あちこち包帯を巻いたトトと、目が合う。

「外傷は火傷程度でしたが、煙を吸い込んでいる恐れがありましたからな。安静にするために、彼は無理矢理引きはがせてもらいましたぞ。いくら言っても離れないので、骨が折れましたな」

レンリはベッドから飛び下りると、思いっきりトトを抱きしめた。それはもう、トトの体中の骨をへし折る勢いで。

「ばっ！ 馬鹿者！ 離せ、苦しい……」

照れ隠しなのか、本当に息が詰まりそうなのか。トトがレンリの肩をタップするが、それも構わずレンリはさらに力を込める。

「レン……」

レンリを見上げたトトの顔に、ぽたりと何かが落ちてきた。

「ううつ……うわあああ……ん」

塞きを切ったように、レンリの目からぼろぼろと涙がこぼれ落ちる。

悲しみを全て搾り出すかのように。

涙が枯れて尽きるまで、レンリは泣きつづけた。

※※※※※

「……落ち着きましたかな？」

「はい」

「……タオル、いりますかな？」

「はい」

「……そちらのハトさんは？」

「風呂を貸してくれっ！」

レンリが泣き止むのを静かに待っていた町医者は、レンリが落ちていたのを見計らって、タオルを渡した。

だが、レンリの涙と鼻水でぐしょぐしょになったトトに、風呂を貸してやることはできない。ここでもやはり、水は貴重なのだ。

「それで……ユスティーネ様は、どんな最後を遂げたのですか？」

「ユスティーネ様って……知ってたんですか？ ユステさんのこと」

「ええ。彼女の呪いを治療していたのは、私ですからな。もともと、あんな『エルヴァスティの女神』を蝕むような呪い、しがない町医者者の私に治せるような呪いではなかったのが残念でなりません」

「『エルヴァスティの女神』……？」

「知らなかったのですか？ あの方は貴女、セシリ様と並ぶ実力の持ち主。あ、そうでしたか……貴女は記憶を……」

「……はい」

町医者は診察机の中を引っ掻き回し、奥から黄ばんだ古い封筒を取り出すと、それをレンリに渡した。

「これは、あの方の遺言書でございますぞ」

「ユステさんの……？」

引ったくるようにして町医者から受取、慎重に封を破る。

そこには懐かしいユステの字（文字はさすがに日本語ではなかったが、彼女から教わった）で、大陸内部の学園「トリアル学園」に行くように、と簡単に書いてあった。

（「トリアル学園」って……まさか、あれかな？）

「ラヴェリの神々」では、ゲーム初心者のために学園生活に模したチュートリアルが存在した。

名前からして、それと関係していないはずはない。

「トリアル学園ですか……私が学長に紹介状を書いて差し上げましょうか？」

「しょうかいじょ……え？」

紹介状は、通常学園に大きな影響力を持っているか、学長の個人的な知り合いでないと書けないはずだ。このにこと微笑む人の良さそうな、悪く言えば平凡な町医者的人物像とはまったく合わないのだが……。

「私は昔、あの学園で薬草^{ハーバリスト}使い専門の授業を受け持っていたことがありますな。学長とも個人的な知り合いですぞ」

人は見かけによらないらしい。

「もつとも、ユスティーネ様が卒業して数年で、退職してこの町に越してきましたが」

「ユステさんも入学していたんですか!？」

「ええ。それはそれは理知的で賢い生徒でしたぞ。いつも仲の良い三人組で連れ立っておいでで。私と関わりがあったのは、主にその三人組の中のリーゼロッテという女生徒でしたが」

「リーゼロッテって、ユステさんがリーゼって呼んでた人ですか？」
「ええ。回復科にいた優秀な方でした」

「ラヴェリの神々」の職業には、主に魔法職と戦士職、軽装職、盗賊職、弓職、そして回復職の六系統があった。

セシリことレンリの命を救ったと聞いていたリーゼロッテは回復科の侍祭志望生アコライトだったらしい。

では、残りの「エル」という生徒はどうったのかと聞くと、彼女は魔法科の死霊術師志望生ネクロマンサーだったのだそうだ。

サービス開始直後からプレイしているといえ、レンリも「ラヴェリの神々」全ての職業を把握しきっているわけではない。運営側がほぼ面白半分で新職業を追加していくせいもあって、最後の方は新職業追加と聞いても興味も関心も湧かなくなっていたほどだ。

しかし、さすがに侍祭と死霊術師という職業の名は聞いたことがある。前者は状態異常回復専門の回復系の職業で、後者は死霊系の魔物を召喚して戦う魔法系の職業だった。

ユステはリーゼとエルの二人がレンリの命を救ったと言っていた。リーゼの方はまだわかるとして、なぜ死霊術師のエルの名も出るの

だろうか。魔法系は回復系スキルの技を全く覚えられないわけではないが、本来教会送りのプレーヤーを蘇生させられるほどのものは持っていないはずだ。

何故、今自分が生きているのか。

何か手がかりはないかと町医者に聞いてみたが、彼は首を横に振った。二人の親友だったというユステでさえ知らなかったのだから、当然といえば当然なのだが。

「何にせよ、あの学園は行っておいた方がいいところです。卒業して資格がとれば、国営ギルドに雇ってもらえますから」

「資格？ ギルド？」

「ええ。今、召喚士サモナーや薬草使いなどの六系統職として働くには、国公認の資格が必要です。逆にそれさえあれば、国営ギルドに雇ってもらえますから、仕事を見つけるにも楽になります」

「ラヴェリの神々」にもギルド制度はあった。

そこでのギルドとは気の合う仲間や利害が一致する団体で組む「グループ」のようなもので、一時的なグループのパーティよりもより結束力が固い。レンリも小規模のギルドを作ったことがある。

昔遊んでいたゲーム仲間もやはりこの世界に転生しているのだろうか。

学園に行けば会えるかもしれない。そう思い、レンリは町医者に紹介状を頼んだ。

009..飛び立つ日

※※※※※

一度、出発前にレンリは焼け野原に建つログハウスに戻った。

「ジール！ セル、リウ！」

ヒツジやヤギ達はほとんどが食われたり逃げたりで残っていなかったが、この三頭は別だった。ログハウスの前で、しっかりとレンリの帰りを待っていてくれたのだ。

ログハウスの中は、いつも通りだった。

机に広がるフェルトの山に、毛糸の束。

いつユステが戻ってきてもおかしくない。

「レンリ、急ぐぞ」

「……わかってる」

鼻の奥が熱くなるのを堪えて、レンリは自分の部屋に向かう。

部屋にしまってたあったあのローブに四年ぶりに袖を通してみると、まだ少し大きいものの、なんとか着られる大きさだった。

「……それを着ていくのか？」

「そうけど？」

「似合わない」

「ほっといてよっ！」

似合う似合わないはともかくとして、このローブに何か魔法効果

が掛かっているのには間違いない。

しかし、このローブは一体誰のものだったのだろうか。

最初は若返ってゲームの中にトリップしたせいでサイズが大きいのだと思っていたが、実際レンリは若返ってはいなかった。

しばらく思案していたかったが、トトに急かされてレンリは台所に向かった。

「トリアル学園までは長旅だからな！ 食べ物もしっかり持って行かぬとな！」

行ってみると、トトが戸棚の中からパンや保存の利くものを引きずり出している。

幸い、レンリにはいくらでも物が入られる魔法の鞆がある。トトが出すものを端から鞆に詰め込んで、戸締まりをしてレンリはログハウスを後にした。

※※※※※

「……もう、行ってしまうのですか？」

セルとリウを町医者に預け、ジールに跨がったレンリは、町外れの草むらに來ていた。手にはユステが残した杖が握られている。

見送りは町医者一人。あの二匹は何としてでもレンリに付いて行くこうとするだろうから、レンリ自身が医院の柱に繋いで來たのだ。もっとも、その時でさえ大騒ぎだったが。

「軽い火傷だけとはいえ、貴女はまだ一応怪我人なのですよ？ トリアル学園の入学受付けは秋ですし、もう二、三日出立を遅らせたらどうです？」

「いえ……いてもたってもいられないので。ありがとうございます」

「学園」と名がついているが、トリアル学園は実質上は「塾」に近いらしい。六系統職それぞれの科に別れ、年齢に関係なく基礎から叩き込まれる。例えば魔法職の召喚士^{サモナー}だったら、魔法科のクラスに入り、他の魔法職志望の生徒たちと半年は基礎、あとの半年は各々の志望する魔法職に別れ、専門教育を受ける。そして、認定試験に受ければ晴れて国公認の召喚士^{サモナー}として、国営ギルドに入るなり個人で活動するなりということになる。もちろん認定試験に落ちればもう一年学ぶことになるが、入退学は基本的に自由とのことだ。

もしさらに上を目指したいのなら、「学園」から「学院」に入っ て学ぶこともできるらしいが、レンリはそこまで勉強する気はなかった。理論で固められた魔法を使うよりも、実践で訓練を積みたかった。それに、ユステが言った通り、この六年で魔族が力を付けているのなら、悠長にしている時間はない。

「良かったじゃん。学園の寮はペット可だってよ？」

「私はペットではないっ！」

気まづさを紛らわすためにトトをからかうと、トトはそれを本気に受け取ってレンリの頭をはたく。

そんな二人のやり取りに安堵したのか、町医者ほっと張り詰めていた肩の力を抜いた。

「……その様子なら安心です。では、いってらっしゃい」「はい」

軽くジールの脇腹を足で蹴って、レンリはバリツシュの町を後にした。

※※※※※

町を出て半日。

ただジールの背に揺られ、ゆっくり野原を進んでいたレンリは、小高い丘になっている場所でジールを止めた。

「どうした？ 飯か？ 飯にするのかっ!？」

「……ご飯ごときでそんなにがっつかないの」

「ご飯ごときとは何だ、ごときとは!」

「はいはい」

朝、町医者ところで軽く物を食べただけで、レンリの腹もトトの腹も悲鳴をあげている。ジールはというと、立ち止まることに足元の草を食んでいるのでそうでもなさそうだが。

「飯でないのなら何だ？」

「いや、その、ちょっとトトに頼みがあるんだけど……」

「私にか……?」

レンリがジールの背から下りる。そして、肩に乗っていたトトを地面に下ろすと、改まって彼の前に正座した。

「何だ？ 私の分の飯を多くしてくれるなら、何でも聞くぞ？」

「がめついな……」

「ほっとけ。で、何だ？」

こほん、とレンリが似合わぬ咳ばらいをした。

「空を飛んでみたいんだけど……乗せて飛んでくれない？」

トトの動きが止まる。

そして、しばしの沈黙の後、彼は一気にまくしたてた。

「何故私がお前を背に乗せて飛ばねばならんだ!? あの時は何故私と言ったろう! ジールと一緒にするでない!」

「まあまあ。そこを何とか。お願いっ!」

パンツと音を立てて、レンリが顔の前で手を合わせた。その真剣さが妙に気になり、トトは理由を聞いてみる。

「……何故だ? 興味本位だったら怒るぞ?」

「違うって。……最後に、この土地を空から見てみたいんだ」

「……そうか」

トトが羽を胸の前で組む。

しばらくそうして悩んでいたが、突如立ち上がると、ボンツというコミカルな音を立てて、不死鳥の姿に化けた。

「……乗っていいぞ」

「ありがとう!」

自身の体に軽く「状態異常」を防ぐ魔法をかけ、レンリはトトの背に乗った。

※※※※※

ふわりと体が浮く感覚がした。

その直後、レンリを乗せたトトの体は急上昇を始めた。

「どのくらいの高度まで上がるんだ？」

「ハラリア高原が見えるくらい！」

「無茶言うな！ 凍傷にかかるぞ！」

「大丈夫。状態異常を回避する魔法をかけてきたから」

「ラヴェリの神々」では「凍傷」は「火傷」や「呪い」とともに状態異常として数えられていた。ならばこのラヴェリでもそれは通じるはずだ。

中級レベルの自分の魔法でも、高度による「凍傷」は十分回避できるだろう。そう考えて、レンリは特に防寒具は身につけなかったのだが、それが間違いだった。

凍傷にならないギリギリの寒さが上昇を始めてすぐ、体を包み込んだ。

「さ、寒いっ！」

「ほら見ろ」

堪らずトトの背に顔を埋めると、煙と焦げのような臭いがする。

「ギブアップするか？」

「ま、まだまだっ！」

地上で待つジールが米粒のように小さく見える。

トトはぐんぐん高度を上げて行き、やがてバリツシュの町が遠くに見えてきた。

「町だ……」

眼下に広がる景色はすでに木も草も区別がつかないほどに小さくなっていて、緑の絵の具で塗り潰されたようになっていて。

遠くには地平線が見えたが、ラヴェリは地球と違って丸くないのか、地平線はひたすら直線だった。

トトはさらに高度を上げる。

手はかじかみ、時折落ちそうになるが、必死にしがみつく。

「見えたぞ！ 高原だ！」

「あ……」

やがて、黒く焼け焦げた高原が見えてきた。

ユステが眠る高原。

息をするのでさえ辛いほどの寒い上空なのに、目頭が熱くなる。

トトは高原が見える高さでしばらく旋回すると、静かに高度を下げた。

010：捕まった日

※※※※※

バリツシュを出て、取り合えずレンリ達一行はアルネの街を目指すことにした。

アルネはバリツシュと違って賑やかな「街」と聞く。王都から派遣された領主と、駐屯の国営ギルドによる自警団がいるらしい。さらに街の周囲は塀で囲まれていて、東西南北の四つの関所として設けられており、厳しい通行制限がされているそうだ。

街に入れてもらえるか不安は残るものの、特にやましいこともない。不安といえばそれは動くぬいぐるみが不審者としてカウントされないかどうかくらいだが、トトは魔法の鞆に入れていけば何とかなるだろう。

アルネの街までの三日間は、全て野宿だった。レンリの財産から考えれば、宿屋に泊まろうと思えば泊まることもできたのだが、問題はその宿屋がないことだった。

見渡す限り、一面の草原。

街も村も集落もない、ただっ広い野原を、レンリはジールに乗ってひたすらに移動し続けた。

幸い野営は慣れていた。

夏になるとユステともに、少し離れた湖までキャンプに行っていた経験が役に立ったのだ。

元いた世界ではどうだか知らないが、このラヴェリでの野宿の基

本は火を焚くこと。

追っ手がかかっている隠密旅行なら未だしも、普通の野宿は野獣避けと視界の確保のために火を焚くことが重要だ。

そして、魔法が使えるなら、その火を魔法で確保するのも良い。特に薪が見つからない場合（今回の旅は特にそう。薪どころか木が全く無い）に有効で、煙たたくなく火事の危険もないことにもメリットがある。

さらに、野宿や野営をするのなら、周りに結界を張ることも必要だ。獣だけでなく、闇に紛れて何が襲って来るか（例えば盗賊など）分らないし、用心に越したことはない。

もつとも、レンリ達の場合はトトがいるので、万が一襲われてもよほどのことがない限りは大丈夫なのだが。

そうして三日間野宿を続け、ようやくレンリ達はアルネの関所にとどり着いた。

※※※※※

「何故私がこんな狭くて暗い布袋に入らねばならんのだっ！」

「しょうがないでしょ！ あんたはどっからどう見ても不審なんだから！ 大人しく鞆に入ってなさい！」

ようやく着いたアルネの関所の前で、レンリとトトは一悶着起こしていた。レンリはある程度トトが駄々をこねることを予想はしていたが、思っていたよりもひどい。そうして揉めている間にも関所通過を待つ列はどんどん短くなっていて、仕方なくトトがぬいぐるみのふりをするので落ち着いた。

「しかし……でかい街だねえ……」

予想以上にしっかり作られた煉瓦作りの塀。おそらく十数メートルはあるであろうそれらの向こうに、アルネの街は見えていた。

「この辺りでは一番大きな街だからな。大商人から流れの行商まで色んなやつらが立ち寄るぞ」

「確かに……」

列に並んでいるのは、きらびやかな飾りを付けた牛車の群だった。り、そうかと思えば身一つの商人だったり様々だ。人よりも馬と牛の数が圧倒的に多い中で、ヤギ連れのレンリは悪い意味で目立つ。

そうこうしているうちに小雨が降ってきて、レンリたちの検問の番が回ってきた。

事前に聞いていた話によると、検問を担当しているのは国営ギルドから派遣されたという自警団。取り調べをしているのはどれも若者ばかりで、腰に物騒な得物を提げている者も多く見られる。

何人かが並行して取り調べを受ける中、レンリ達を担当したのは、何と青灰色の髪の子供だった。

「……トト、この世界って、青い髪の人とか緑の髪の人とかピンクの髪の人とかって普通にいたりするの？」

「今更何を……ああ、お前は『神の落とし子』だったな。前世の記憶でも残っているのか？ お前のいた世界ではそういう髪の色はなかったのか？」

「まあ……首都東京には局所的に存在したけど……『オタク』って人種が……」

「オタク？」

「あんたは知らなくていいから」

青年は紙とペンを片手に、黙々とレンリの荷物を調べてゆく。ジールの積み荷は少なく、あっという間に終えた青年は、今度はレンリの方を調べにかかった。

「あの……すみませんが、フードを取っていただけませんか？」

「あ、はい」

レンリが小雨のせいで被っていたフードを下ろすと、青年の顔が固まった。

「ま、魔族……！？」

「はい？」

「魔族襲来だ！ 魔族が来たぞー！」

青年が叫ぶ。

きょんとんとしているレンリを、あっという間に手に手に得物を持った集団が取り囲んだ。

「え？ え？ どういうこと……？」

「馬鹿者！ 妖精族エルフの耳も魔族と同じで尖っているだろう！ お前は髪も黒いし、間違えられているんだ！ 誤解を解かぬと殺されるぞ！」

「えーっ！？」

杖などの得物は検問前ドロッのために取り上げられている。レンリは今完全に丸腰状態で、とても抵抗できる状態ではない。

「チッ！ 手間のかかるやつだ！」

ボンツとトトが不死鳥の姿に化ける。

すると、今にも襲い掛からんとしたた集団がどよめき、勢いが崩れた。

「不死鳥……！ 神獣だ！」

「いかん、皆、ひざまづけ！」

レンリが呆けている間に、事態は一変する。

取り囲んでいた集団は得物を地面に起き、頭を垂れてまるでトトを敬うかのような態度を見せたのだ。

「え？ え？ どういうこと？ 神獣って？」

「私はそこの魔物とは違う。人語を操り、強力な力を持った『神獣』という有り難い魔物なのだ」

「でも結局は魔物なんだね？」

「うっ……」

そういえば「ラヴェリの神々」でも不死鳥は倒される側の魔物ではなくNPC的な役割で、クエストに協力してくれる存在だったと思いつく。道理で不死鳥に関する記憶が曖昧なわけだ。

そうしているうちに、リーダー格と思われる男が前に進み出て、トトに（レンリではなくあくまでトトに）お辞儀をした。

「失礼いたしました！ まさか神獣様のお連れの方だとは知らず、失礼な真似を……」

この「トトの連れ」という表現がレンリは気に食わない。傍目か

ら見たらそうかもしれないが、レンリの中でのトトの立ち位置は「ペット」。差がありすぎる。

トト本人も満更ではない様子で、「うむ」などと頷いているから余計に腹が立つ。

「なんであんたが偽物だって疑わないのよ、この人たち。化けてるんだから、偽物かもしれないって普通は思うでしょ？」

「何かに化けるといいうのは大変なことなんだぞ？ それに同種——^{ヒューマン}人族なら人族、妖精族なら妖精族の別人化けるなら未だしも、人が魔物になったり、反対に魔物が人になるのは普通はできない。特別な道具や術がないとな。だが、この関所には魔法解除の陣が描かれてあるから、大掛かりな術は使えない。大方、私の魔力の強さでも感じ取ったのだろう」

「ふーん……」

レンリとトトが密談していると、男が言いにくそうに会話に割り込んできた。

「あの……神獣様。申し訳ございませんが、お連れの方が魔族かどうか調べさせていただいてもよろしいでしょうか？」

※※※※※

「いだだだっ！ いだいですっ！」

「すみませんね。こればかりは規則なもので……」

関所の側の天幕に場所を移して、レンリには入念なチェックがされていた。

魔族の特徴は黒髪黒目に尖った耳と歯、そして尻尾らしい。

当て嵌まるのは黒髪と尖んがり耳だけなのだから免除してもらえても良さそうなのだが、魔族と多種族の混血という場合も考えられるのだそうだ。

今、レンリの口を器具で開けさせて、口の中の歯が尖っていないか見ているのは先程の青灰色の髪の青年。本当に申し訳なさそうに調べているからまだいいものの、そうでなかったらきつと蹴っ飛ばしていただろう。

尻尾のチェックはさすがに女性が行ったが、やっと開放されたときに謝りに来たのは、やはりその青年だった。

「本当にすみませんでした。最近魔族の動きが活発化しているものですから、ちゃんと検査しろって領主がうるさくて……」

「あ、いえ、大丈夫ですよ」

「こいつの場合は魔族も驚く減らず口だな」

「あんたはちよっと黙ってなさい！」

ぬいぐるみの姿に戻ったトトが口を挟む。彼がこの姿に戻っても怪しまれないのは、どうやら不死鳥が目立たないように行動するために化けている仮の姿だと思われるかららしい。本当はその真逆なのだが、先入観とは恐ろしいものだ。

「ご迷惑をおかけしました。困ったことがありましたら、いつでも声をかけてくださいね。お力になりますよ」

「ありがとうございます」

人の良さそうな青年に別れを告げると（もとい、検問から開放されると）、レンリはジールを連れて今晚の宿探しに向かった。

011：宿探しの日

※※※※※

「宿は絶対良いところに泊まるぞ！」

「賛成！ 異議なし！」

関所を抜け、レンリ達は宿屋を探して歩いていった。

アルネの街はかなり大きい。大通りを行き交う人も多く、ジールがいなければ人混みに流されてしまいそうだ。もちろんレンリは「ラヴェリの神々」でこの街に立ち寄ったことがある。しかし、パソコン画面を通して見るのと実際に見るのではとても差があった。道は舗装されていて、それが気に入らないのか、ジールはしょっちゅう地面を蹴っている。

両脇に並ぶ商店も様々で、パン屋、食堂、菓子屋から雑貨屋、服飾店、武器屋、さらには何やら怪しげな店もある。

そして宿屋の数も多く、もちろん質もピンからキリなのだが、レンリ達は小さな宿に入った。高級旅館には気後れして入ることすらできなかったのだ。

天井の隅には蜘蛛の巣、埃っぽく、ある意味で目立つ宿だった。

「一泊8千リン。前払だよ」

受付に座る中年の女将が無愛想に手を出す。8千リンなら銀貨8

枚で払うのが妥当だが、生憎小銭入れには銀貨が5枚と一枚10リン相当の銅貨が3枚しかない。

合わせて5千30リン。

仕方なく鞆の中の金貨を出すと、女将は途端に怒り出して、金貨を突っ返した。

「あんた！ 何考えてんだい！ うちみたいなぼろい宿屋はね、そんな多額のお釣りが出せるほどの貯えはないんだよ！ 当てつけなら他所へ行きな！」

ぽかんとしているレンリ達を、入口から見える食堂にたむろしていた風体の悪い男達がげらげらと笑う。

仕方なく宿屋を出た後も何度か同じような宿屋を回ったが、対応が似たり寄ったりで、昼ごろにはレンリはすっかりしょげていた。

「諦めるな！ 今夜はベッドで眠るんだろ？」

「トトは肩に乗ってるだけだからいいけど、あたしは大変なんだから……」

異世界に来てからの四年をほぼ高原での引きこもり生活で送ったレンリには、あの邪険な対応はかなり堪えた。高原やバリッシュは知り合いとしか会わず、その皆が親切だったが、ここでは違う。行き交う人皆が他人で、レンリは急に心細くなった。

「とにかくお昼にしようか……」

「そうだな」

木のベンチから腰を上げて、賑わいを見せているパン屋に向かうとしたときだった。

人混みの中を走ってきた二人の子供に、鞆を引ったくられたのだ。

「あっ！」

子供は二人ともフードを深く被っているので、人相が分からない。ちらりと自警団のことが頭に浮かんだが、この人混みに紛れられたら、見つけだすのはまず無理だろう。

「待てこの泥棒！」

高原暮らしで長距離を歩くことには慣れているが、短距離はそうでもない。むしろローブとブーツと杖で走りにくく、子供との差はぐんぐん開いていく。

「ま……待ちなさいよ！」

と、その時、不意に鞆を持った方の子供の進路に、足が突き出された。

「わっ！」

子供が転ぶ。

その拍子に鞆が落ち、子供はそれを拾おうか迷っていたが、仲間に引っ張られて鞆を諦め逃げていった。

「あ、ありがとうございます！」

子供の足を引っ掛けたのは、レンリと同年くらいの少女だった。その少女が鞆を拾う。

「これ、アンタの？」

深く被ったキャップから流れる金髪が印象的な少女だ。

「そうですそうです！」

「へえ、魔法が掛かってるじゃん」

ようやく追いついたレンリが鞆を受け取ろうとすると、少女は無遠慮に鞆の中に腕を突っ込み、金貨の袋を一つ取り出した。

「え……？」

「取り替えてあげたお代。毎度ありっ！」

「えーっ!？」

鞆を地面に落とすと、少女が走り出した。

その速さは先程の子供の比ではなく、花壇、ベンチを足場にして、あっという間に屋根の上まで駆け上がる。

さすがにこれは走って追うことはできない。

「トト！」

「任せとけ！」

走って追えないなら、飛んで追うまでだ。

トトが化ける。

だが、今度は不死鳥ではなく、鷹くらいの大きさの白い鳥に化けた。

「サイズ変更」可なの!？」

「当たり前だ!」

さっと飛び立ったトトは、すぐに少女に追いつき、背中を足で蹴飛ばした。

「きゃあっ!？」

バランスを崩した少女が鞆を取り落とす。少女も屋根から落ちそうになったが、何とか立て直すと、屋根の向こうに消えた。

「トト、よくやった!」

自慢げに戻ってきたトトを肩に乗せ、レンリは鞆を拾おうとする。すると、パン屋から出てきた人がそれを拾い、土埃を払ってから渡してくれた。

「あ、すみま……って、朝の関所の……」

「はい」

拾ったのは、自警団の青灰色の髪的青年だった。

「あの、お仕事は……?」

「今はお昼休みなので。……もしかして引ったくりに遭われたんですか?」

「はい……」

昼休み中だという青年は、手にパン屋の紙袋を持っている。そこから立ち上って来る匂いに、レンリの腹が鳴った。

「腹だけは正直なんだな」

「う、うるさい！ トト、あんたは黙ってなさい」

青年が二人のやり取りに苦笑する。

「あの、お昼まだでしたらご一緒しませんか？ 一人前余分に買っ
てあるんですけど……」

「いいんですかっ！？」

「いいのかっ！？」

レンリとトトが食いつく。

「ええ。本当は夜食用だったんですけど……詰め所で賄いが出るの
で、大丈夫です。失礼ですが、お名前は？ 僕はコーディといいま
す」

「あたしはレンリで、こっちはトトとジールです」

※※※※※

レンリ達とコーディは、街の中心から外れた庭園部に場所を移し
ていた。街中のベンチにヤギ連れというのも目立つし、ジールにも
草を食べさせたかったからだ。

幸い小雨も上がっていて、暖かい陽射しが降り注いでいる。

コーディが買ってきたというドーナツ片手に、レンリは先程の宿
屋の愚痴を零していた。

「この街は地価や税金がとても高いので、極端な富の差が生まれて
しまうんですよ。金持ちはさらに金持ちに、貧乏人はさらに貧乏に。
貴女が行ったその宿屋も、いつ店を畳むか分からない状況でぴりぴ

りしていたのかも知れません」

「そういうもんなんでしょうかね……」

「そうやって親が失業してしまい、見捨てられた子供達が犯罪に走るんです。さっきの引ったくりのように……」

「ストリートチルドレンみたいなもんですか？」

「え？ ストリ……すみません、何と言いましたか？」

「あ、いえ、何でもないです、ほんとに何でも……」

つい、元いた世界の言葉が出てしまう。

「何で領主は手を打たないんですか？ 確かこの街、王都から派遣された領主がいるって……」

「領主なんて名ばかりです。実際は僕ら自警団に仕事を押し付け、自分は私腹を肥やすだけ。でも、盾突くこともできないんです、僕らは」

「でも……自警団が力を合わせれば、何とかなるんじゃないんですか？ 締め上げて言うことを聞かせてしまえば……あ、それは犯罪か」

「犯罪であっても、出来ることなら僕らはとっくに決行していましたよ、そんなこと」

コーディが悔しそうに芝生を筆る。彼の手に握られているドーナツは、全然減っていない。

「領主だって馬鹿じゃありません。自警団は、四つのギルドが合同で作っているんです。西の関所担当の僕らは『朱の羽根』というギルドです」

「え？ でも、自警団は国営ギルドが……」

「国の援助を受けていれば皆国営ギルドです。仕事を斡旋してもらえたり、補助金が出るので大抵のギルドは国営ギルドですよ。ちな

みに他にあるのは、国に登録はしてある私設ギルド、そして未登録無許可の違法ギルドの二つです。領主は国営ギルドでもタイプが違う仲の悪い四つを集めて自警団としているんです」

「じゃあ反乱を起こそうとしても……」

「確実に他の三つに潰されてしまうでしょうね。実力はどこも似たようなものですから」

すると、今まで黙々とドーナツを食べていたトトが口を開いた。

「他のギルドと手を組んでしまえば良からうが。実力が逼迫しているなら、形勢は一気に変わるぞ」

一見良い案に思えてレンリも頷きかけたのだが、しかし、コーデイはそれを否定する。

「無理ですよ。他がうちと手を組むはずありません。第一、うちのトップ、ギルドマスターが許しませんよ」

「手を組む、等と相手と対等な立場もしくはそれ以上を望むからいかんだ。お前らが吸収合併されてしまえばいいだろう？ ……お前、この街が嫌いなのか？」

「何てこと言うんです！？ ここは僕が生まれ育った街ですよ？ 嫌いなわけ……ないじゃないですか」

レンリはコーデイの口調の勢いが途中からなくなったのが気になったが、トトが彼を追い込むように喋った。

「なら妙なプライドは捨てろ。最後に勝った者が英雄、それ以外は悪役だ」

「……………」

言葉に詰まったコーディが黙り込む。重い空気が流れたが、レンリがトトの頭を掴み、それを破った。

「トト！ 何てこと言うの！ ご飯ご馳走になっておきながら……！ あんた、今日は晩御飯抜きっ！」

「何を言うか！ 長年生きてきたこの私が折角知恵袋を開いてやっていると言うのに……」

「あんたのはゴミ袋でしょうが！ ほら、行くよ！」

罰が悪くなり、レンリはトトの顔面に指を食い込ませながら立ち上がった。

「コーディさん、ご馳走様でした！ そしてごめんなさい！」

呆氣に取られるコーディを置いて、レンリは走って庭園を後にした。

※※※※※

「……でも、さっきあんたが言ったような方法で、本当にこの街って改善するわけ？」

「ん？ そんなわけないだろう」

宿を探して歩きながら、レンリはふと先程の会話を思い出していた。

「二つのギルドが合併してたところで、人族は欲が強いからな。主権争いで内部分裂が起こるか、部分的に分離していく一派が現れるかで、結局は元の木阿弥かそれ以下だ」

「じゃあ何で……」

「こういうのはな、勢いだ。何もしないよりは行動を起こした方がいい。成せばなるさ」

011: 宿探しの日(後書き)

☆お礼とお知らせ☆

お気に入り登録件数が50件を突破しました！
読んで下さっている皆さん、感謝感激です！

※※※

「感想を受け付けない」状態になっていたのを「感想を受け付ける
(制限なし)」に設定し直しました。

012..月夜の日

※※※※※

『ねえ、ほんとに僕のために皆のお金使っていいの?』

『当たり前よ! アンタのために使わずに、一体何に使うっての?』

『でも……シドは反対してるよ?』

『いいのよ、あんなやつほっとけば。それより、アンタはちゃんとトリアル学園で勉強してきなさいよ? それで、帰ってきたらこの街を変えてよね?』

『う、うん!』

※※※※※

「コーディ?」

声をかけられて、コーディははっと顔を上げた。

振り返ると、同僚の少年がマグカップを二つと紙袋を持って立っている。

「どうした? ぼうっとして。くそ真面目なお前らしくないじゃん」

「『くそ真面目』は余計ですよ。……どうしました?」

「いや、差し入れ貰ったから、一緒にどうかと思って」

少年がマグカップの一つを渡す。中身は温かい牛乳だった。

「この辺りは夜も冷えるからな。小雨も多いし」

「すぐに止みますけどね。ほら、もう月が出てる」

「ほんとだ」

二人は西の関所にある櫓やぐらの上にいた。何人かで交代しながら、昼夜ずっと見張りをするのだ。

「そーいやお前、この街出身だっけ？」

「そうですよ。貴方は？」

「もっとあったかいとこ。海なんか見えちゃってさ。すごい綺麗なんだぜ」

「羨ましいです」

「あ、そうそう。差し入れ、これ」

少年が紙袋の中からドーナツを取り出す。奇しくもそれは、コーデイが昼間、レンリとトトに奢った物と同じものだった。

「よく買えましたね。あんな人気店のドーナツ。売り切れてなかったんでしょか？」

「だよなあ……てか、あのギルマスがパン屋に並ぶ姿が想像出来ん。あの人、変な所だけ律儀だからなあ……一体何時間並んだんだろうな」

「案外、剣で脅したのかもしれない」

「そうかもな」

コーデイの所属するギルド「朱の羽根」は決して大きいとは言えないギルドだ。それでも人数はそこそこいる。

国営ギルドとは言え、差し入れの経費まで出るわけではなく、当然ドーナツの代金は奢ったギルドマスター持ちだ。

「そーいえばさ、さっきお前何考えてたんだ？ 珍しくぼうつとしてたじゃん」

「いえ……少し昔のことを思い出して……」

「昔のこと？　そういやお前ってさ、あんまり自分のこと喋らないよな。この街のどの辺で育ったんだ？」

「……あちこちですよ。この街のことなら、知らないことはないくらいに」

「ふーん……」

会話が切れる。

それを気まずく思ったのか、少年はマグカップの中身を一気に飲み干した。

その後しばらく続いた静寂を破ったのは、コーディの方だった。

「昼間……ちよつとある人とこのドーナツ食べたんですけどね」

「ある人？　誰？　ギルドのやつじゃないの？」

「違います。ほら、今朝、僕が魔族と間違えた……」

「え？　女か？　くそ真面目で堅物なお前が？」

「だから『くそ真面目』は余計です。『堅物』も」

「じゃあその敬語、何とかしろよ。同じ十七なのに」
「癖ですから」

しれっとコーディが少年の突っ込みを受け流す。そして、マグカップを空けると立ち上がった。

「僕はもうすぐ上がりですけど、貴方は？」

「俺ももう上がり。ってか、とっくに上がり。差し入れ欲しくて待ってただけ」

「……貴方はもう少し『くそ真面目』になった方がいいんじゃないですか？」

「まあまあ。固いこと言うなって、堅物君」

折よく先輩の青年が櫓に上がってきたので、交代で二人は宿舎に向かった。

※※※※※

「……おい、コーデイ、あれって……」

「何か倒れてますよね……人でしょうか？」

「今日はもう非番なのになあ……めんどくさいけど、しょうがないか」

二人が泊まっている、というよりほぼギルド専用の宿舎は関所の近くにある。その前に、何やら布の塊のようなものが落ちていた。

暗い中、街灯の明かりに照らされたそれは、人のようにも見える。

職業柄、どんなに疲れていても見逃すことが出来ない二人は、その布の塊に近寄った。

「おーい、行き倒れかー？」

少年が腰に下げていた剣で塊をつつく。すると、それはわずかに身動きをして、うめき声を上げた。

「……人だ」

「そのようですね」

もぞもぞと動いたそれは、再び動かなくなる。

日が沈んでから大分経つ。

もしかして何時間もここで放置されていたのかと思うと、少し嫌な予感がした。

大きなこの街では、裏路地で人が死んでいても珍しことではない。

そして、時折大通りでも人が倒れていることもある。それが病気が犯罪かは別として。

「おい、どうした？ 襲われたのか？」

外傷はないかと調べているうちに、その人物の顔を隠していたフードが取れた。

「あっ！ こいつ、今朝の……魔族もどき！」

「レンリさん……？」

現れたのは、レンリの顔だった。

「レンリさんがいるということは……トトさんとジールもどこかに……」

辺りを見回すと、案の定ジールがいた。主人が倒れたというのに、呑気に花壇の草を食んでいる。

「レンリさん？ 大丈夫ですか？」

軽く揺すってみる。

すると、どこからかそれを制止する声が聞こえた。

「揺すらんほうがいいぞ。頭を打っているからな」
「トトさん？」

街灯の上にぬいぐるみの姿。トトだ。

「魔法を暴発させおった……まあ、心配はいらん。その辺に寝かせておけ」

「寝かせておけと言われましても……」

レンリが倒れているのは、昼には往来が激しい大通り。放っておくわけにもいかない。

「あれって、あの神獣だよな……？」

「そうですよ。どうしましうか、この人……このままにもしておけませんし」

「取り合えず俺らの宿舎に運ぶか？　ソルミナさんなら怒んないだろ」

「どうしましうか」

コーディ達はレンリを担ぎあげると、そこの宿舎に向かった。

013 酔っ払いに絡まれた日

※※※※※

「はあっ!?! 宿に泊まるために大人に化けようとした、だあ!?!」
「……はい」

コーディ達の宿舎に運ばれ、介抱されて目が覚めたレンリは、コーディの同僚の少年に笑われていた。

「……だって、子供だから邪険に扱われるのかと思って……」
「馬鹿じゃないのか、お前」
「……はい」

どこに行っても小馬鹿にされるか怒鳴られるかのどちらかなので、レンリはそれが自分が子供だからではないのかと思った。それで上級魔法に手を出し、魔法を暴発させて今に至る。

「大体なー、お前みたいな子供が金貨を出したら、一発でスリとか引ったくりに狙われるに決まってるんだろ」

「金貨以外の持ち合わせが無かったんです! ……ってあなただつて子供じゃないですか!」

「少なくともお前よりは大人だ」

「いくつなんですか?」

「ん? 十七」

「あたしと一つしか変わらないですよ!」

「甘い! 十七と十六の差は大きい!」

「まあまあ……」

コーディが止めに入る。

すると、宿舎を切り盛りしている女性がタイミングよく飲み物を四つ持ってやって来た。

「なあに？　喧嘩？　貴女はまだあんまり興奮しないほうがいいわよ。打った頭に血が上っちゃうから」

手際よく三人と一羽の前にカップを置いて、女性は自分も椅子を持ってきて座る。

「私はこの宿の責任者のソルミナ。貴女は？」

「あ、レンリです。こっちのぬいぐるみはトトといいます」

ソルミナは茶髪に巻いたバンダナを取って、少年の前に置かれたカップを手を取った。

「あ、ソルミナさん、それ俺のじゃ……」

「仮にも怪我人の女の子相手に喧嘩を売るような子はお預けよ。クラウゼ、貴方は自分で煎れてらっしゃい」

「へいへい……」

少年——クラウゼは、案外素直に台所に向かった。

ソルミナの宿は、レンリが昼間回った宿と同じように高級とは言えない宿だった。しかし、隅々まで綺麗に掃除されていて、レンリが今いる一階の団だんらん樂室兼食堂はどこか暖かみが醸し出されている。家庭的で、すぐく落ち着く宿だった。

その家庭的さ故か、レンリは宿を探して歩き回ったことを、ついソルミナに話していた。

「……まあ、この街は金持ちをひがむ人と金持ちにこびる人が圧倒的に多いからね。貴女、何でそんなにお金を持ってるの？ 金貨なんて貴女みたいな子が持ち歩くものじゃないでしょうに。もしかして盗んだとか？」

「違います！ ……その、遺産なんです」

レンリが持っている金貨はおそらく「センリ」が稼いだものだ。センリが既にこの世界に存在しないと考えると、あながち遺産といえないこともない。少し罪悪感を感じたが、他に上手い説明も思いつかなかった。

「そう……悪いこと聞いちゃったわね。そうだ！ ねえ貴女、うちに泊まらない？」

「え？」

ソルミナがエプロンのポケットから宿の台帳を取り出す。

「うちは今でこそギルド専用の宿舎みたいになっちゃってるけど、元は長期滞在のお客様用の宿屋だったんだから。一週間単位で、一ヶ月でも一年でも借りられるのよ？ どう？ それなりにお金もあるから、両替もしてあげられるわ？」

「いいんですか？」

「いいのかよ？」

レンリの声と、カップを手に戻ってきたクラウゼの声が重なった。

「俺らが毎年宿の更新するときには追い出したがるくせに……」

「それは貴方達のギルドマスターの酒癖を治させてから言いなさい」

「そ、そんなの無理に決まってるじゃんか！？」

クラウゼの声が裏返る。先程まで強気だった彼の態度が一変したところを見ると、どうやら本当に「朱の羽根」のギルドマスターは怖いらしい。

噂をすればなんとやらで、にわかに宿の外が騒がしくなった。

「あらあら、イルゼがお帰りよ」
「げっ！」

クラウゼもコーデイも顔を引き攣らせついる。一体どんな人なのかとレンリが身構えると、開け放ってあった戸から入ってきたのは、二人の人間に抱えられた若い女性だった。

「あの人がギルマスのイルゼさん……？」

鮮やかなコバルトブルーの髪が目立つ女性だ。背中に身長を超える大剣を背負っているが、千鳥足で引きずられているせいで、それをあちこちにぶつけていた。

「そうよ。でも、イルゼはあだ名。本当はイライザっていうの。イルゼって呼ぶと怒るから、イライザって呼んだ方がいいわ」

レンリが返答しようとしたその時。

イライザが宿の隅の方に縮こまる様にして座っていたクラウゼとコーデイの二人を見つけて怒鳴った。

「おう、お前らぁ！ 何で今日早上がりだったのに付き合わなかったぁ！」

「いや、その……俺らまだ未成年何で、居酒屋とか入れなくて……」

どうやらイライザは、彼女を抱えて入ってきた二人と飲みに行っていたらしい。離れたところからでも酒の臭いが漂って来る。彼女を運んできた二人は苦笑いすると、さっさと階段を上って引き上げてしまった。

クラウゼとコーデイがいくら彼らの代わりに彼女に付き合いたくても、ラヴェリでの成人年齢は十八。二人ともまだ成人するまで一年ある。

すると、イライザは顔をしかめるて千鳥足で二人に詰め寄り、クラウゼの胸倉を掴んだ。そして何と自分より背が高い彼を細腕で持ち上げて、壁にたたき付ける。

「んだとお！ お前らぁ！ ギルマスのオレの言うことが聞けねえってのかぁ！？ 明日までに十八になっとけ！」

「無理……っすよ……！」

無茶苦茶にも程がある。

イライザはクラウゼを下ろした後も好きなだけ説教（もどき）を垂れると、不意に視線をレンリに移した。

「そこのお前！」

「は、はい！？」

「……見ない顔だな？ 新入り？」

「いえ……あの……」

「そーかそーか！ 新入りか！ じゃあ歓迎会やろう！ そうしよう！ ソルミナ、酒！」

「はいはい」

酔った勢いでイライザがレンリに抱き着く。プロポーションもよく、胸元に大胆なカットを入れた服を着ているのに抱き着かれると、さすがに同性のレンリも真っ赤になった。

「イライザ、あんまり人に抱き着かないの」

「あのなー、これはスキニシップ！ なー、コーディ？」

「いや、その、僕に言われなくても……」

「なー？ コーディ？」

「あの……」

「なー？ コーディ？」

「……はい」

職権濫用だ。

イライザはレンリに抱き着いたまま、ソルミナが持ってきたコップを一気に呷る。

「あれ……？ 何か目の前が……？」

飲んだ途端、立つのも覚束なくなったかと思うと、後ろ向きにひっくり返った。

「ごめんね。睡眠薬、盛らせてもらったわ。コーディ、クラウゼ、部屋に運んであげて」

「りょーかい」

「分かりました」

彼女が背負っている大剣の重さもあるのか、二人掛かりで持ち上げると、彼らは階段を上ってイライザを運んで行った。

「普段はいい人なんだけどね……玉に傷ね。さ、レンリ、宿泊の手続きしちゃいましょ？」

「あ、でも一週間も泊まる気は……」

「宿泊の手続き、しちゃいましょ？」

「……はい」

問題があるのは客の方だけではないらしい。

レンリがそれに気付いたのは、宿泊台帳にサインし終えてからだっ
った。

※※※※※

レンリ達は二階の使われていない小部屋に通された。もう何年も使っていないとのことだったから、てっきり埃でも被っているかと思いきや、そうでもない。床も天井もごく最近掃除したあとがあつて、小綺麗な部屋だ。

「ジールは外の小屋で預かってくわ。ギルドの人達、馬も使うから厩舎があるのよ。小さいけどね」

「ありがとうございます」

「じゃ、ごゆっくり。朝は食堂に来てね、朝と晩は食事付だから」

慣れた手つきで燭台に火を点し、ソルミナが部屋を出て行く。澆刺とした彼女が出て行くと、部屋の中は少し暗くなったように感じた。

「私はもう寝るぞ。今日は疲れた」

宿舎に入ってからずっと黙っていたトトは、真っ先にベッドの中

に潜り込んだ。

「あ、真ん中に寝ない！　そこはあたしが寝るとこなの」

「この街に入れたのは誰のお陰だと思っておる！」

「……はいはい。でも、せめて端っこに寄ってよね」

レンリも疲れきっていて、口喧嘩に付き合う元気は無かった。
ローブを脱いで軽装になると、すぐにベッドに入った。

014：泥棒に入られた日

※※※※※

イライザが散々荒らした団欒室を元通り綺麗に直した後、ソルミナは部屋の明かりを消して、自室に引き上げた。

その様子を、外からじっと見ている者達がいた。

※※※※※

「リンチェ、ほんとうに行くのか……？」

「当ったり前でしょ？ あんな金づる、逃がしてなるもんですか！」

日付はどうに変わっている深夜。向かいの路地から宿舎を眺める三人の子供がいた。子供が出歩くには遅すぎる時間だが、三人とも慣れている様子だ。

「だ、だってよ……お前昼間、あいつの連れの鳥にやられてたじゃんか」

「あれは後ろからだったからよ！ それに、今ならあの鳥もアイツも寝てるに決まってるわ。こんなチャンス、逃すものですか！」

「リンチェがそこまで言うなら……」

よく見ると、子供のうち幼い二人は昼間レンリの鞆を引ったくった子供で、もう一人はその二人の足を引っ掛けて取り替えた後、金貨を盗もうとした金髪の少女だ。

「だ、大体！ リンチェが昼間、上手く仕事してたら忍び込むなん

て真似せずに済んだんだぞ！」

「そうだ！　ってか、何で俺らのこと転ばしたんだよ？　俺らだけだったら逃げ切れる自信あったのに……」

「アンタら、馬鹿ねー」

宿舎を見ていた少女が振り向く。そして、二人の子供の目線に合わせて膝を軽く折り曲げた。

「あのね、人間っていうのは、持ってるものとか全財産取られたら意地でも追っ手来るものなの。それこそ血眼になって。アンタ達も例えば銅貨十枚持ってたとして、それ全部取られたら絶対に逃がすかって思うでしょ？」

「うん」

「絶対に捕まえてとっちめる」

二人が頷いたのを確認して、少女はさらに続ける。

「アイツは見たところ、魔法使いだった。たぶんあのままアンタ達が逃げ切っても、必ず居場所を突き止めていたはず。でも、取られたのが銅貨十枚中一枚だったら、アンタ達は取った奴を絶対に見つけようと思う？」

「一枚だったら……」

「他の仕事をした方が……」

「でしょ？　鞆の中を漁ったら、金貨の詰まった袋はまだたくさんあった。きっとそれだけ稼いでんのよ。その中の一袋だったらアイツも深追いはしなかったはず。分かった？　じゃ、アタシ行ってくるから。もし見つかったら、逃げるときは手助けよろしくね」

「分かった！」

音を立てにくい布靴に履き代えて、少女は路地を出る。そして音

もなく宿舎に近づく、表に積んであった木箱に飛び乗り、二階の窓の冊によじ登った。

「さすがに戸締まりはしっかりしてあるわね……」

木戸は押しても全く開かない。

少女は一端体勢を立て直すと、頭から髪留めのピンを引き抜いた。それを木戸の間に差し込み、上へ押し上げる。

一階の窓は未だしも、泥棒が入るとは考えられにくい二階の窓は鍵がただの門である場合が多い。少女はそれを承知で、カモが二階に泊まったことを知って、敢えて昼間やられた相手の部屋に忍び込もうとしているのだ。

「やたっ！ 開いた！」

金属の軽い音がして、ゆっくりと木戸が外側に開いた。

少女は木戸の片方を慎重に開け、隙間から室内に滑り込む。

思ったとおり、カモはぐっすりと寝入っていた。泥棒避けの結果すら張っていない。

「どこまで良いとこの嬢ちゃんなんだか……」

鞆は無用心に床に放り出してある。

床が軋まないように注意しながら忍び寄ると、少女は鞆を開けて金貨の袋を取り出した。そして、持参の中に綿を詰めた袋に金貨を移し替えていく。これは硬貨同士が袋の中でぶつかって音を立てないようにするためのもので、綿を詰めただけだがその割に音を抑え

ることができる。

作業の間、金貨は多少の音を立てるのだが、寝入っているカモは全く気付く様子はない。

(こりゃ楽勝ね……)

粗方移し終えると、今度は空になった袋に重さをごまかすために石を入れる。

何も知らずスヤスヤ眠るカモをほくそ笑み、少女は部屋を後にしようとする。

——だが、後ろからその首筋にぎらつく刃物が押し当てられた。

途端にどっと吹き出す冷や汗。叫んで外にいる仲間に助けを求めようにも叫べない。

「……アンタ、誰？」

同業者か、敵か。

金貨を渡せば引いてくれる相手か、命も渡さなければいけない相手か。

因果な生業をしている少女には、そのどちらも多すぎる。

この見極めは重要だ。

しかし、相手はどちらでもなかった。

「……腕、落ちたな。俺の気配に全く気付かないなんて」

「まさか……！」

ゆつくりと後ろへ視線をやると、そこにはフードを深く被っているが、見知った顔があった。

「シド……!？」

驚愕で少女の青い目が大きく見開かれる。

「何でアンタ……というより、生きてたの……?」

「生きてたらまずいか?」

「だって……この街でアンタみたいな子供がたった一人で生きて行けるはず……アタシ達だって寄り集まって生きていくのがやつとなのに……」

「確かに、この街は冷たいからな」

顔なじみの登場に警戒心を忘れた少女が振り向こうとするが、その首筋に強く刃が押し当てられた。喉元の皮膚に赤い血が滲み、刃物を伝って床に落ちる。

こういう場合、踵のあるブーツだったら相手の爪先をそれで踏み付けるのが常套手段だが、生憎今は布靴。音を立てないようにと履き代えて来たのが徒になった。

少年もそれを分かっているのか、特に警戒している様子はない。

「……掟、忘れたか?」

「掟……?」

「子供には絶対に手を出さない。どんなボンボンだろうと、お坊ちゃんだろうと、子供はカモにしない掟だ」

「そんなの……!」

「知ったことか」という少女の台詞は、刃物を押し当てている少年によって掻き消された。少女は不意をついて振り向き様に蹴りを食らわそうとしたのだが、軽く避けられて逆に鳩尾に一発入れられたのだ。

「くうっ……」

一瞬息が止まり、少女は崩れ落ちる。少年は顔なじみだからといって、容赦はしなかったようだ。

「金貨を元に戻せ。今すぐに、だ」

少年は刃物を少女の顔に突き付ける。木戸からわずかに入ってくる月明かりに、刃が不気味にぎらついている。

少女は悔しさに唇を噛み締めたが、ゆっくりと金貨を元に戻し始めた。

——ように見えた。

「もうアンタなんかの指図は受けないわよ！」

少女は大声で叫ぶと、石が詰まった袋を思いっきり少年に投げつけたのだ。

「なっ！」

部屋の住人を起こさないように、少女が事を構えるつもりはない、それが当たり前だと考えていたところにつけこまれた。不意をつかれ、袋は何とか避けたものの、石が詰まった凶器は派手な音を立て

て木戸を破壊する。

「へっ！？ 何々！？」

「何事だっ！？」

案の定、寝ていたカモーレンリとトトが飛び起きる。

少年はすぐさま出て行ったが、鳩尾に痛みが残る少女はそうも行かなかった。

「あれ？ え？ え？ 泥棒……？」

寝ぼけていたレンリが、床の上の少女を発見するにはそう時間は掛からなかった。

「どうした？ また魔法でも暴発させたのかー？」

さらに悪いことに、他の客にまで先程の音は聞こえているようだ。

少女は痛む腹を抱え、窓から

落ちる様にして逃げ延びた。

※※※※※

突然の破壊音。

それまで高原で羊に埋もれる夢を見ていたレンリは、その音で飛び起きた。

月明かりに照らされた室内には、昼間見た金髪の少女。寝ぼけて

状況が理解できないうちに少女は逃げて行ったのだが、代わりにコーディとクラウド、ソルミナ、その他ギルドの知らない人々も集まって来ていた。

「はあ？　泥棒？」

事情を話すと、さすが自警団を名乗っているだけあって、他のメンバーは警戒網を張り外に飛び出して行く。ただしその中にギルマスのイライゼの姿はない。

「で？　どんなやつだった？」

後に残ったのはコーディ、クラウド、ソルミナの三人。知っている人の方が事情を話しやすいだろうということで、この三人が残されたのだ。

「えと……金髪で、あたしと同じくらいの歳の女の子です。あ、昼間もその子にお金を盗まれそうになって……そういえば、コーディさんもあの時いましたよね？」

「え？　僕ですか……いや、その犯人の方はよく見てなかったのだから……」

「私が華麗に飛んで背中を蹴飛ばしたあいつだ！」

「何だよ使えねえな」

クラウドがコーディを小突く。

「まあとにかく、レンリはもう一度お休みなさいな。犯人探しは自警団に任せて」

ソルミナがほぼ強制的にレンリをベッドの中に押し込むのだが、

結局レンリは朝まで一睡もできなかった。

015：三度襲われた日

※※※※※

「頭、痛え……こりや二日酔いかな……？」

翌朝、街が活気づきはじめた頃に、「朱の羽根」のギルドマスター、イライザは宿舎の階下に下りてきた。鮮やかなコバルトブルーの短髪は寝癖だらけで、お世辞にも年頃の女性の恰好とは言えない。

「あれ？ あいつらどこ行った？ 寝過ごしたか？」

朝の光が窓から入る清潔な団欒室には、ギルドメンバーはおろか、ソルミナさえいなかった。普段ならこの時間は夜勤明けのメンバーとこれから出勤のメンバーが入り混じって、一日のうちに団欒室が最も賑わう時間だ。だが、朝食の食器さえ机に出ていない。

とりあえず待っていれば誰か来るだろうという持ち前の樂觀さで座っていると、不意に表が騒がしくなり、どやどやとメンバーが入ってきた。

「あ、イライザさん、起きましたか？」

「起きんの遅いっすよー」

「夜中に宿舎に泥棒が入って、大変だったんですからね！」

夜回りに行っていたのか、彼らの目の下には一様に隈が出来ている。

彼らがさらっと言った一言にとんでもない単語が混じっていて、職業柄イライザは思わず立ち上がって叫んでいた。

「は!？ ど、泥棒!？ あたしの宿舎に!？」

が、二日酔いに叫んだのが効いて、頭が割れるように痛む。そういえば昨晚の記憶がない。それほど飲んだということか。

イライザが頭を抱えて座り込んだのを見て、侍祭アコライトの一人が杖を手
に彼女に近寄った。

「二日酔いですか？ 治しましょうか？」

「ああ、頼む……」

二日酔いも立派な状態異常の一つ。侍祭アコライトは軽い回復魔法をかけて、
台所から水を持ってきた。

「だいぶ楽になった。ごめん」

「いえいえ。お安いご用です！ 自警団として回復魔法を使うより、
ギルマスの二日酔いを治す方が回数的には多くて、もう慣れちゃい
ましたよ」

「……どういう意味だ、それ」

普段なら睨むところだが、生憎今はその元気もない。

「そういえばさ、さっきの泥棒ってなんだ？ こそ泥か？ それと
も大物か？ どこに忍び込んだんだ？」

「あ、それがですね……一般のお客さんの部屋なんですよ」

「一般客？ この宿にそんないたか？」

「コーディの友達です。あ、ほら昨日の朝、彼が魔族と間違えた神
獣連れの女の子ですよ。まだ宿にいますから、今、呼んできますね」

※※※※※

一晩中コーディとクラウゼに見張りに付いていたもらったが、レンリは結局一睡も出来ていなかった。むしろ二人がいたから眠れなかったのかもしれないが、そこは文句は言えない。

他のギルドメンバーと同じように隈を作っている三人の元に「イライザが呼んでいる」という知らせが来たのは、すでに朝とは言えない時間になってからだった。

「イライザさんって、昨日の酔っ払いの人ですよね……？」

「ええ。僕らのギルマスです」

「大丈夫だって。取って食ったりはしないはずだから、たぶん」

その「たぶん」が気になるのだが、いかんせん自警団。まがりなりにも「警察」だ。間違っても人を食ったり殺したりはしないはず。昨晚の暴挙を見ていると不安になったが、レンリは彼女を怒らせないうちに階下に向かった。

※※※※※

「……で？ 泥棒ってどんなやつだった？」

昨晚とは打って変わって、まるで警察のような（自警団だが）取り調べに、レンリも多少緊張していた。トトもこういう状況には不慣れなのか、レンリの膝の上に乗ったまま先程から一つも言葉を発しない。

「えと、金髪のあたしと同じくらいの女の子でした」

「金髪？ 他に特徴は？」

「いや、帽子被ってましたし、あんまり見てなかったもので……」

周りで二人の会話を聞いていたギルドメンバー達が唸る。昨日見たところ、このアルネの街には金髪の人間なんてざらにいるようだった。まして人相もわからないような少女。追いつけようがない。

「……ま、とりあえずお前は役所に金、預けて来い。また狙われたら話になんねえからな」

「役所……？ あ、そうか、預金システムですね！」

「ラヴェリの神々」には「預金システム」というものがあつた。ゲームではモンスターに倒されて教会送りになると、プレーヤーの所持金や持ち物、経験値が少し減る。それを防ぐために比較的大きなターミナル都市に役所を設置して、プレーヤーはそこに金品を預けて置くのだ。

このラヴェリでもそのシステムは生きているらしく、イライザの話によると、街の中心部に役所があるというのだ。

三度襲われる危険があるというので、イライザは案内役兼護衛役でクラウゼとコーディを任命した。

※※※※※

「リンチェ、もういつペン行くの？ これで三度目だよ……？ それに昨日はシド兄も止めに来たんでしょ？」

「しょうがないじゃない！ あんなカモ、滅多にいないのよ！ ……それに、アイツのことをそんなふうには呼ばないの！ もう仲間じゃないんだから」

「でも……」

役所に近い裏路地で、昨晚レンリの部屋に侵入した三人が、また集まっている。うち幼い二人はすでに逃げ腰なのだが、もう一人の金髪の少女はそうでもない。目深に被った帽子の下から、ずっと役所を睨んでいる。

「もう二回もしくじってるからね……アイツは必ず金を預けに来るはず」

街の中心部にある役所は、東西南北どの関所からも遠く、四つのギルドから成り立つ自警団の盲点となる場所だ。

少女もそれを承知で、最後のチャンスとして張っているのだ。

そして少女の読み通り、カモは本当にやって来た。

※※※※※

「しかしお前、本当に世間知らずだなー。そんな大金、普通預けとくだろ？ 世の中、怖いことはたくさんあるんだぞ？」

「そ、そのくらい分かってますよ！」

自分より年上の少年二人を引き連れて、レンリは街中を歩いていた。二人が中途半端に武装しているために（レンリも人のことを言えないが）街中では目立つ目立つ。聞けばコーディは聖騎士、パラディンクラウゼは魔法戦士で、二人とも戦士職なのだそうだ。それゆえ得物も剣と分かりやすい。

人々に避けられながら街中を歩いていくと、やがて荘厳な外観の役所が見えてきた。材質はよくわからないが、一見大理石のような石で出来ている。

その雰囲気気圧されて、レンリは役所の前で佇んでいた。

と、そのとき。

不意に、背後の人混みから悲鳴が聞こえた。

「どいて！　どきなさい！」

刃物が空を切り裂く音。それとほぼ同時に人垣が割る。その先には、あの金髪の少女が立っていた。

「レンリ、下がってろ！」

クラウドが背負っていた長剣を抜き放つ。彼の職業、魔法戦士はマジックウォリアーその名の通り、戦士職では珍しく、魔法を駆使して戦う職業だ。だから戦士職が苦手とする長距離攻撃もお手の物。抜刀と同時に刀身が炎を帯び、それが少女に襲い掛かる。

しかし、炎は少女に当たらなかった。彼女は人混みの中に逃げ込み、追撃を躲したのだ。

「ちいっ！　ちょこまかと……コーディ、お前はレンリのお守りでもしてる！」

聖騎士パラディンは死霊系アンデットのモンスターに強い戦士職。人族である敵には向かない、そう判断しての指示だ。

だが、クラウドの判断は間違っていた。
少女は人族ではなかった。

再び現れた少女に向けて炎を放った際、彼女の帽子が吹き飛んだ。

「なっ……獣人族……？」

帽子の下から現れたのは、猫の耳と殺意に満ちた青い双眼。

ここ最近衰退している種族の登場に、クラウゼに動揺が走る。

少女はそれを見逃さなかった。

次の瞬間、クラウゼの皮鎧の隙間を縫って、彼の腹に短剣が突き刺さった。

016..秘密を知った日

※※※※※

『……でもリンチェ、本当に僕がいなくなっても平気?』

『平気に決まってるでしょ! シドが何と言おうと、アンタは学園に言っているの!』

『でも、でもさ、お金があれば食べ物も服も買えるし、病院にだって行けるんだよ? それを僕なんかのために……本当にいいの?』

『いいんだってば! 何度も言わせないでよ! アンタはアタシ達のことなんか気にしないで、しっかり勉強してきなさい! それで帰ったら、必ずこの街を良くしなさい!』

※※※※※

「クラウゼ!」

獣人族の少女の短剣が、クラウゼの皮鎧の隙間に刺さっている。群集から悲鳴が上がったが、不思議なことにクラウゼは怪我をしたそぶりを見せなかった。それどころか少女の手首を掴むと、力任せに放り投げたのだ。

「大丈夫ですか!?!」

「お前はレンリのそばにいろ! ……こいつ、普通の泥棒じゃない!」

駆け寄ろうとしたコーディを声で制止し、クラウゼは皮鎧と服の下から、さらに固い皮を取り出した。

「ギルマスが酔って殴り掛かって来てもいいように、いつも服の下に仕込んでんだよ！」

確かに昨晚の横暴っぷりでは、そのくらいの備えがないと命がいくつあっても足りなさそうだ。

「くっ……卑怯よ！ そんな重装備！」

「どっちが卑怯だよ！」

クラウドが剣を奮う。剣が纏う炎は蛇のように動き、少女に襲い掛かるが、彼女はそれをするりと交わして路地裏に逃げた。

「コーディ、追ってくれ！」

「え、でも……」

「いいから！ レンリは任せろ！」

コーディはレンリを振り返って一瞬躊躇ったが、同僚の声に鬼気迫るものを感じ、路地裏に走った。

コーディが見えなくなるとすぐ、クラウドは腹部を押さえて膝を着く。仕込み鎧には穴が空き、血がにじんでいた。

「やっぱ皮だけじゃ短剣もギルマスも防げないか……」

内臓には達していないが、中々深い傷だ。失血で弱る前に宿舍に戻って手当してもらわなければならない。

「おい、レンリ、ちょっと……あれ？ どこ行った……？」

手を貸してもらおうと思ってレンリの名を呼んだが、すでに彼女

の姿は人混みのどこにもなかった。

※※※※※

「レンリ、いいのか！ あの小僧のところにいなくて！」

「いいの！ あたしは元々護衛されるような質じゃないんだから！」

トトを肩に乗せ、レンリはコーディを追って裏路地を走っていた。大通りから少し入っただけなのに、路地裏は妙に閑散としている。石畳をブーツが打つ音がやけに大きく響いた。

「お前なんぞが追っても、すぐ振り切られるぞ！」
「いいの！」

だが、トトの言うとおりで、ローブと杖が邪魔になり、案の定すぐにコーディを見失った。

「……ここ、どこ？」
「知らん！」

その上迷子。笑えない。

人に道を尋ねようにも誰もおらず、途方に暮れていると、不意に声がかかった。

「お前、自警団か？」

声がどこからしたのかと探すと、屋根の上に少年が座っている。しかしフードを深く被っていて、声と体型でようやく「少年」と分かる程度だ。人相ももちろん分からず、かなり怪しい。

「……だったらどうするの？ あんた、もしかしてさっきの仲間？」

「いや。違う。自警団じゃないならいい。……お前の追っているあの青っぽい頭のやつ、向こうに行ったぞ」

少年は狭い路地を指した。路地というより建物と建物の間の隙間。気を付けていないと見逃してしまいそうな道だ。

「今ならまだ間に合う。追わなくていいのか？」

「なんであんたが教えるのよ？」

「気まぐれだ。信じないならそれでもいい」

少年の言葉を信じようか信じまいか悩んだが、レンリはすぐに路地に入った。

※※※※※

コーディは獣人族の金髪少女を追って走っていた。

「待ちなさい！ 止まりなさい！」

走る速さも体力もコーディの方が上だが、少女は屋根伝いに逃げていく。少女が屋根から屋根に飛び移る度に、コーディは余計な回り道をしなければならないのだ。

あとはもう体力勝負。そう踏んでいると、突然少女が足を止めた。

「……『止まりなさい』って……いい御身分ね、さすが自警団になっただけのことはあるわ、コーディ」

「え……?」

少女が逃げる様子はない。普段ならすぐに取り押さえるのだが、少女の台詞に動揺して、コーディは固まった。

「あら、アタシのこと、覚えてないの?」

「誰ですか……貴女」

伸びきった前髪を少女がかきあげる。初めてはつきりと彼女の顔を見たコーディは、大きく目を見開いた。

「貴女は……」

だが、コーディの言葉の半分は、風を切って飛んできたナイフによって掻き消される。咄嗟に剣を抜いて弾いたが、続けざまにナイフは飛んで来る。少女の短剣とは違うもっと小さなナイフだ。

「誰ですか!?!」

突然飛んできたナイフに驚いているところを見ると、それを投げたのは少女の仲間ではない。

答えはすぐに返ってきた。

「俺だ、コーディ、リンチェ」

煙突の上に、フードを被った少年が座っている。

「シド! アンタよくもノコノコと……!」

激昂した少女が叫んで短剣を投げ付けるが、少年はそれを軽く躲す。

そこへ遅れてレンリが到着した。

「コーディさん！　って、あれ？　さっきの……？」

目を丸くしたレンリを、少年は嘲笑う。

「遅かったな、お前。まあ、いいけど。とりあえずコーディを連れて帰れ。そのために案内してやったんだから」

「どういうこと……？」

「本当は昔馴染み三人で話でもしたかったんだけどな。しょうがない。ここに気が立ってるのが一匹いるから」

「どういう意味よ！？」

状況が分かっていないのは自分だけらしい。そう判断したレンリは、振り返ってコーディを問い詰めた。

「コーディさん、どういうことですか？　あいつの言ってる昔馴染み三人ってもしかして……」

嫌な予感の中した。

「……そうです。彼等は僕の幼馴染み……いえ、家族だった人達です」

017：東の自警団に遭遇した日

※※※※※

「家族って……どういことですか……？」

「そのままの意味です。僕は元孤児でした。彼らはその時の仲間なんです」

コーディは淡々と語る。不思議なことに、その間隙だらけの彼に、どちらも攻撃してこなかった。

「僕は彼らが貯めていたお金のおかげで、トリアル学園に入学し、こうしてギルドに入ることができています。……奨学金と借金に大分頼りましたが」

「でも……それがなんで攻撃して来てるんですか？」

「それは……」

「俺らの金で学園に行った癖に、帰ってきた途端、俺らを取り締まるんだもんな。そりゃリンチェも怒るさ」

飄々と喋るフードの少年を獣人族の少女が睨みつけたが、彼はそれを気にせず言葉を続けた。

「だから俺は反対したんだ。こいつのために金を使うのを。国営ギルドなんて所詮国の犬。わざわざ金払って首輪を付けてもらうなんて、どうかしてるぜ、お前ら。マゾか？」

「シド！ アンタはちょっと黙ってなさい！」

ついに少女――リンチェが切れ、シドという少年に短剣を投げ付けた。少年はひよいとそれを躲すが、リンチェは間髪入れず、懐か

ら取り出した短剣でシドに切り掛かった。

「あっ……！」

短剣がシドのフードを掠める。フードが切れ、赤毛がパッと散ったが、顔の脇を掠めて行ったリンチェの手首を掴み、彼女の鳩尾に膝を叩き込んだ。

「くっ……！」

リンチェが腹を抱えて疼くまる。シドはその彼女の喉に容赦無く蹴りを入れた。

「シド！ やりすぎですよ！」

「どこが？ 殺しちゃいないだろ？ お前らよりマシさ」

バランスを崩したリンチェは屋根から落ちて、動かなくなった。微かに体が上下しているところを見ると死んではいないようだったが、骨の一、二本は折れているかもしれない。

「ところでさ、コーディ。お前なんで……」

何事も無かったかのようにシドが話し掛けるが、後半部分は突然現れた別の声に掻き消された。

「こーんな所に居たのかア、『アルネの獅子』さんよオ」

大弓を手にした男が、路地の先に立っている。そして気が付けば、レンリ達は無数の人間に包囲されていた。

※※※※※

「あー……まだ頭痛い……マイリ、もっぺん回復魔法、掛けてくれない？」

「ダメです！ ギルマスはぜんっぜん反省しないんですから！ もう少し苦しんでください！」

「ああ？ お前、それがギルマスに対する態度かつ！ ……って、ダメだ、大声出すと響く……」

イライザは机に突っ伏した。

「精々反省して下さい！」

そう言いながらも、侍祭のマイリはコップに水を注ぎ、イライザの前に置いた。職業柄か、それとも慣れているのか、看病が板についている。

「クラウゼ君が帰ってきたら、彼にもちゃんと謝るんですよ！ 昨日、胸倉掴んで壁に叩き付けちゃったんですから！」

「はいはい……。そういやあいつら、遅くないか？ どこまで金、預けに行ってたんだ？」

「そういえばそうですね……ちよつと心配ですし、見に行つて来ましょうか？ 最近また『アルネの獅子』の目撃情報が出てますし」

マイリが杖を手に、窓に向かう。通りのどこにも彼らの姿は見られない。

「『アルネの獅子』だあ？ あんなただのこそ泥だって」

「でも、あれだけ尻尾を掴まれそうになっても逃げきれるこそ泥なんて、そうは居ませんよ。大泥棒ですよ、彼は」

「いや、ただの泥棒猫だね。泥棒に大も小も無い。……でも確かに心配だね」

「ギルマス……！」

普段横暴な彼女が部下の身を案ずる様子に、マイリが目を潤ませる。そうか、ようやく反省してくれたか、と感動したのも束の間、イライザはすぐにそれを打ち破った。

「よし！ オレも見に行こう！ ……ということでマイリ、回復魔法頼む」

「……狙いはそれですか」

「な、何を言うか！ オレあ純粹に部下の身を心配して……」

「もういいです。いいですよ。はいはい、分かりましたよ」

にんまりと笑うイライザはどこか憎めず、マイリは溜息ながらに魔法を掛ける。

「……で？ あいつらどこ行っただっけ？」

「お役所です」

「えー……オレ、役所苦手なんだけど……」

「ギルマスは自警団団長でしょうがっ！」

「団長つつつてもあと三人も居るしい……そういや東の団長さん、『アルネの獅子』を追ってるんだってな。あの強欲ボンクラに捕まえられんのかね」

「こんなことを言うのもアレですけど、できれば捕まって欲しくないますよね……彼は一種のアンチヒーロー的な存在ですから。貧困層に盗んだ物を分けているって噂もありますし」

「ああ。あのボンクラが手柄を立てるってだけで腹立つ。あー……考えたらなんかムカムカしてきた。行くぞマイリ！ 妨害に！」

「え？ そっちなんですか！？」

壁に立て掛けてあった大剣を背負い、イライザは外へ出た。

※※※※※

「『アルネの獅子』……?」

突如現れた男に、シドが殺気立った視線を投げ付ける。

硬直状態が続いたが、その間にレンリはコーディにその意味を聞いた。

「『アルネの獅子』って……?」

「シドの通り名です。彼は珍しい獅子の獣人ですから」

「獅子……ってことは、獣人族って色んな種類の動物の系統がいるですか?」

「ええ。猫族、犬族、鳥族……全部まとめて獣人族なんです。リンチェは猫族ですが」

「ラヴェリの神々」では獣人族といえば主に猫族だったが、このラヴェリにおいて、そのことは常識なのだろう。コーディは少し怪訝な顔をしたが、すぐに答えてくれた。

その間にも、シドと男の睨み合いは続く。

「一昨日、俺らの管轄の富豪の家に盗みに入ったら。その方がお冠でなァ。てめえの首になら何千万リンと出すって言ってんだ。そろそろ年貢の納め時じゃねェかァ?」

「……ああ、あの意地汚い肉の塊みたいな奴の家か。トラップの魔法陣も穴だらけで、てっきり盗みに入って下さいて言われてるのかと思った」

「ふざけんなよ、泥棒猫がア！」

激昂する男と、あくまで冷静なシド。面白いほど温度差がある。

しかし、シドが冷静さを保っていたのは、そこまでだった。

「……そういえばなア、今年の祭だが、お前んとこの代金、まだ入ってないんだがなア。お前のお気に入りのその子猫ちゃん、生贄に出してもいいのかなア？」

レンリには何のことか分からなかったが、シドにとってはよほどのことだったのだろう。ぴくりとフードの下のシドの片眉が動く。かと思った次の瞬間、彼は懐剣を抜いて、男に斬り掛かった。

人族では絶対に有り得ない素早さ。妖精族^{エルフ}の特徴が魔法と弓に秀でていることのように、獣人族の特徴は身体能力が高いことだ。

だが、男も去るもの。間一髪のところで大弓で剣を受け止め、カウターで蹴りを放つ。掠りはしたものの、シドも何とかそれを避け、再び屋根の上へ跳び上がった。

「あいつ何者なんですか……？」

「東の関所担当の自警団団長、ジークです」

「あれが……？」

横暴なイライザも自警団のようには見えないが、この男はそれと違った意味で、自警団に見えない。雰囲気は禍々しいのだ。少なくとも、レンリはこの男が好きになれそうに無かった。

「自警団とは名ばかりで、彼らは領主に媚びへつらう盗賊集団と一

緒です。ああいうのがいるから、僕達は領主に対抗できないんです」

コーディが心底悔しそうにレンリにつぶやくが、それがジークの目に留まったようだった。

「んん？ お前、イライザんとこのだな？ 獅子狩りか？ お前じや役不足だ。とっとと失せやがれェ！」

……こいつ、嫌いだ。

レンリの敵愾心に火がついた。

今は大人しいが、引きこもる前は男子だろうと先生だろうと売られた喧嘩は全て買っていたレンリだ。友人を虚仮にされて黙っている性格ではない。むしろ四年間、一度も喧嘩せずに過ごしてきたことが不思議なくらいだ。

かといって、この人数を相手にできるほど、レンリはまだ強くない。

トトに頼るという手もあるが、それでは彼らが殺されかねない。

こういうときは、逃げるに限る。

彼らの目的は、シドを捕まえることだ。彼も逃がせば、十分な嫌がらせになる。

「ねえ、コーディさん。シドって人逃がしたら、あたしも罪に問われるんですか？」

「え？ ああ、たぶん罪になります。それどころか重罪です」

「でもコーディさんは、彼を逃がしたいですよ？ 一度は家族だった人ですし」

コーディは今でもシドとリンチェの二人を好いている。
レンリにはその確信があった。そうでなければ、リンチェは気絶
しているのだから、とつくに捕まえていただろう。

「……ええ」

案の定、コーディは首を縦に振った。

「じゃあ、コーディさんが二人を捕まえちゃえばいいんじゃないで
すか？ 捕まえて連行。でも、途中で力及ばず、逃げられました。
これならだめですかね？」

「あつ……そうか、その手が……」

幸い、レンリやコーディ達四人は、壁際と屋根に追い詰められて
いる。シドが逃げない所を見ると、向こうの路地にも人がいて、彼
を狙っているのだろう。

走って逃げられないなら、飛んで逃げるまで。

「トト！」

「分かっておる！」

トトが化ける。

突然現れた不死鳥に場は騒然となり、どさくさに紛れてトトはレ
ンリ達を乗せ（シドはコーディが捕まえ、リンチェは足に掴み）舞
い上がった。

だが。

「逃がすかアッ！」

地上から放たれた矢が、トトの左の翼の付け根を貫いた。

018：惑わされた日

※※※※※

「トトっ！」

翼の付け根から鮮血が飛び散る。バランスが崩れるが、トトは落ちることなく、近くの屋根に不時着した。

「トト、大丈夫!？」

リンチェを下ろし、巨大な鍵爪で屋根瓦を掴んで何とか屋根から落ちないようにしているが、屋根にしがみつくのがやつとのようなだった。

「……人間を殺すのは趣味じゃないが、殺っていいか？」

「ダメ！ 曲がりなりにもあいつら自警団だから！ イライザさんたちに迷惑掛かっちゃうから！」

許可を求めるだけ理性が残っているようだったが、いつキレるか分からない。四年前、高原でワイバーンと戦ったときのように街中で暴れられたら、一体どれほどの死者がでるのか、検討もつかなかった。

そうしてもたついている間にも、東の自警団は追って来る。

「トトはとりあえずぬいぐるみに戻って！ 止血するから」

「すまん……」

小さくなったトトの翼にハンカチを巻く。白いハンカチはすぐに赤くなったが、大きい不死鳥の姿のまま手当するよりはずっと楽だ。

「コーディ、お前、自警団だろ。どうにか出来ないのか？」

同じ敵から逃げていることで仲間意識が芽生えたのか、シドがコーディに話し掛けた。

「無茶苦茶言わないで下さい。多勢に無勢です。それに下手をすれば僕は貴方達を逃がした罪に問われるかもしれないですよ、シド！」

「ふーん……じゃあ、俺とリンチェがどっかに行けば、少なくともお前らに落ち度はない、と」

「え……？」

唐突に、シドが屋根から飛び降りた。彼を見つけ、追ってきた自警団は彼を取り巻き立ち止まる。

「さすがにリンチェ背負って逃げるのは無理だから、そっちはそっちで頼むわ。じゃ」

「『じゃ』って……」

シドがフード付きマントの内側から細みの剣を取り出す。鞘から抜きはしなかったが、身体能力の高い獣人族にそれで殴られれば、結構なダメージになるだろう。取り出した弾みにフードが外れ、彼の赤毛の頭に付いている獅子の耳が露わになった。

「ほんとに獣人族なんだ……」

周囲を囲む自警団が少しでも動けば、音を拾おうと耳がレーダー

のように動く。そして、彼らを睨みつけていたかと思うと、一番近くにいた剣を持った男に殴り掛かった。

「っ……！」

男はそれを止めようと剣を前に構えたが、鞘はいつまで経っても剣には当たらなかった。

シドは、殴り掛かる振りをして、大きく跳ぶと、男の頭の上を跳び越えたのだ。

「なっ……！」

高さにして二メートル、距離にして十メートルは行くであろう跳躍。殴り掛かったのは、助走を得るためのカムフラージュでしかなかった。

呆気にとられる自警団を尻目に、シドは彼らとの距離をぐんぐん開けていく。そしてあっという間に路地を曲がって消えてしまった。これでは矢を放つても魔法を使っても意味がない。

よって、自警団の目は残ったレンリー——もとい、リンチェー——に向けられた。

「お前らァ！ さっさと降りて来い！」

先程トトを射ったジークが、再び矢を番えた。相当苛立っているのだろう。弓を持つ手が震えている。

「あのー……あたしは一般人……」

「うるせエ！ 俺らのシマで罪人を逃がしたんだ。てめエも立派な犯罪者だ！」

自警団には厳密に縄張りや担当区域はないが、それぞれの関所を別のギルドが取り締まっていることもあり、関所から近い区域はほぼそのギルドの領土のようになっていて。だから、質の悪いギルドの関所に他の自警団が安易に近づくと、因縁を付けられて攻撃されることさえある。

（『シマ』って……『ヤ』の付く自営業のおっさんですか……？）

逃げているうちにいつの間にか東の関所に近づいていたのだろう。気絶しているリンチェがいては逃げることも出来ない。

追い詰められたと思ったその時。

「どこがお前らのシマだって？」

景色が揺らいで、突如別の路地裏に変わる。そして、壁だったところから、イライザとマイリ、そしてもう一人少年が現れた。

「て、てめエ！ 西の……どういうことだ！？ 幻術か？」

「そういうこと。残念だったなあ。お前らはずっとこのフレンの術中だったんだよ！」

ぺこりと少年が白髪の手を下げた。

幻術とはイリュージョニスト幻術士が使う術のこと。めくらまし、幻影から光系の魔法を得意とする彼らの十八番だ。

「一体いつから幻術を……」

「さあな？ お前が自慢げにペラペラ喋ってた時じゃねえの？」
「くそっ……！」

コーディのような下っ端なら、例え殺してしまってもそんなに影響はないが、イライザのようなギルマスともなれば話は別だ。四つのギルドのパワーバランスは崩れ、加害者のジークのギルドは孤立するだろう。

それくらいはいくら頭に血が上っていても分かる。

ジークが悔しそうな顔をするのをイライザはほくそ笑む。

「……で？ オレのシマで何やってんだ、お前」

歯ぎしりするが、ジークにはどうしようもなかった。イリユージョニスト 幻術士の恐ろしいところは、幻影だけでなく失明するほどの強烈な光さえ操れるところ。すでに術中に嵌まっている彼らにはすでにどうしようもなかった。

「……覚えとけよ」

「そんなありきたりな台詞なんて覚えとけねえよ」

捨て台詞を吐いて、東の自警団は去っていた。

※※※※※

彼らが見えなくなるとすぐ、イライザは近くの木箱の上に座り込んだ。
んだ。

「イライザさん、ありがとうございます、わざわざ助けに来てもらって……」

コーデイが礼を言っても、反応しない。だが、何が可笑しいのか、突然笑い出した。

「あははははっ！ あー、面白かった！ 騙すのって病み付きになるな！」

「え？ 騙す？ さっきの幻術のことですか？」

「違う違う！ フレン、もう術、解いていいよ」

「了解」

白髪の少年、フレンが杖を振るう。すると、再び景色が揺らいで、イライザ達が来る前の路地裏に戻った。

「どういうことですか……？ ここは僕たちの担当区域ですよね？」

先刻「オレ達のシマ」宣言をしたのだから、ここは西の関所に近い区域のはず。フレンがジーク達に東の担当区域という幻影を見せていたお陰で、一気に形勢逆転、あの難局を乗り切れたはずだ。

しかし、イライザは大笑いしたまま、それを否定した。

「違う違う！ ここは奴ら東の自警団の担当区域。途中で西の区域に見えたあれが幻影。あの強欲ボンクラに一泡ふかせてやったぜ」

「え……」

つまりは最初から幻術など掛けていなく、途中の自分達の区域に見えた部分が幻影だった、そういうことだ。幻影と現実が逆だと思ひ込まされていたのだ。

「ギルマス、子供じゃないんですから、騙しただの騙されたので

「一々喜ばないで下さい！」

「でも結果的にほとんど怪我せずにあの場を終わらせたんだ。ナイスアイディアだろ。フレンもごくろーさん」

「いえ」

「ところで……」

イライザが視線を未だ屋根から下りて来ないレンリ達に向けた。

「その金髪女は誰だ？」

金髪女とは紛れもなくリンチェのこと。髪と角度で上手い具合に耳や人相が見えないらしい。

「あ……い、行き倒れですよ、行き倒れ！　ね、コーディさん？」

「あ、ああ、そうです。二日酔いの行き倒れです。だからあのまま屋根の上に寝かせて置いてあげれば……」

レンリもコーディも声が裏返っているのだが、よほど鈍いのか三人とも何も言わない。

だが、「二日酔い」に親近感を覚えたのか、イライザが最悪の提案をした。

「二日酔いの行き倒れか……よし！　連れて帰って看病しよう！」

019..偶然の日

※※※※※

「え……？ 連れて帰る、といえますと……？」

「ん？ そのまんまだが？ 連れて帰って看病。お前らは二日酔いの恐ろしさを知らないからそんなに薄情になれるんだよ」

別にレンリやコーディが薄情になっているわけではない。むしろ情が厚いから今この状況に陥っているわけだ。

「あのー、ギルマス、今私が回復魔法を掛けてもいいんですけど……？」

マイリが遠慮がちに申し出るが、イライザは連れて帰ると言うて聞かない。もしかしたらリンチェの正体がばれてしまっているのではないかと思ってしまうほどだ。

「何だってあの女はこいつを連れて帰りたがるわけだ？ 何のメリツトもないだろうに」

「……たぶん、今夜一緒に呑みたいんですよ。東の自警団の鼻をあかしてやったとかなんとかいう口実で、呑むつもりです。最近見んなお酒の臭いを嗅ぐだけで逃げますから」

「あの女の酒癖を治せば、ここの全ての自警団を牛耳ることも可能だろうに」

「領主を改心させるよりも難しいですよ、それは」

トトとコーディがこそこそと会話しているうちと、屋根の下から催促の声がかかる。

「コーディ！ さっさとそいつを下ろして来い！」
「あ……ちょっと待ってください」

このまま下ろしたら、リンチェの人相も耳もばれてしまう。
そこで、コーディはレンリと相談して、彼女の頭に包帯を巻くことにした。幸い、コーディは包帯を常備している。猫の耳の形状を隠すためにきつく巻き、さらに人族や妖精族の耳がある位置に耳がないのが分からないように顎にも包帯を巻く。こうしてリンチェは頭だけミイラ男（女？）の様になった。

「何してんだー？」

「頭を怪我しているみたいなので、応急処置をしてるんです」
「早くしろよー」

イライザがいらつきはじめたころになって、ようやく包帯を巻き終え、コーディはリンチェを下ろして宿舎に向かった。

※※※※※

「あら？ どうしたの、その方」

宿舎に戻ると、朝はいなかったソルミナが戻っていた。床にモツプ掛けしている。

「ん、行き倒れ仲間。二日酔いだって！」

「……イルゼ、貴女なんでそんなに嬉しそうなの？」

「イルゼって呼ぶな！ それに、嬉しそうになんてしてない！」
「嘘おっしゃい」

しかし、口では否定してもイライザが嬉しそうなのは明白で、笑顔を無理矢理ごまかしているためか、顔が奇妙に歪んでいた。

「ソルミナ、確か上に部屋余ってたよな？」

「ええ。少し埃っぽいけど、一昨日掃除したばかりだから大丈夫よ。……その子、寝かせとくのね？」

「ああ。なんか他人事とは思えなくてな……」

「そうでしょうね。何でもいいけど、お金はちゃんと払いなさいよ？ こっちも商売なんだから」

色々きついことをいいながらも、ソルミナはイライザ達にお茶を配り、コーデイに部屋の鍵を渡した。

「はい、これ。二階の隅の部屋だから」

渡されたのは、依った麻の紐に付けられた古びた鍵。鍵の形状が少し違うだけで、レンリの部屋の鍵と似ている。

二人と一羽はそれを受け取ると、そそくさと階上に引き揚げた。

※※※※※

「……で、どうします、この人……」

「さあ……僕は回復系には疎いので……」

少し埃っぽいベッドにリンチェを横たえてから、レンリは窓を開けた。

昼の光が室内に降り注ぐ。

「……レンリさんは、回復系の魔法は知らないんですか？」

「さあ……まだ魔法は習ったことないので……」

ユステは魔導書を与えるばかりで、レンリに直接魔法を教えはしなかった。

「トトは？」

「私にそんなものを求めるなっ！」

「……だよねえ……」

シドは余程強く蹴ったのが、リンチェは一向に目を覚ましそうになかった。呼吸はしているので死んでいるということはなさそうだったが、倒れた拍子に頭を打って、脳震盪を起こしているかもしれない。

「そういえば、なんでイライザさんって『イルゼ』って呼ばれるのを嫌がるんですか？」

ただ座っているこの時間が妙に気まずくて、レンリは適当な話題を振ってみる。

「イルゼ」は別に卑下するようなあだ名ではない。だからイライザがこだわる理由がよく分からなかった。

「ああ、お姉さんの名前と似てるから嫌なんだそうです」

「姉？ 仲悪いんですか？」

「相当らしいですよ。幼かったイライザさんを船から放り出したってくらいですから」

「え？ 船？」

そういえば、レンリはまだイライザの職業を知らない。「船」か

ら考えられる職業はだいぶ狭まるのだが……。

「イライザさんは海賊コルセアですからね。昔は船乗りだったんです」

海賊コルセアは六系統職のうち、盗賊系の職業の一つだ。使用武器は主に剣などで、水に近いエリアでの能力値が上がることで有名だった。水辺エリアのボス戦では、パーティに海賊コルセアを入れることが常識だったくらいだ。

コーディによると、ラヴェリでの彼らは実際に船に乗って行動するらしい。トリアル学園では航海術なども学んでいるそうで、「武装した商船」と大差はないそうだ。

「……でも、その割にはイライザさん、お酒弱いですよね……」

海賊コルセアと言えば「船上で仲間と呑みながら語り明かす」がレンリの持つイメージだ、イライザが船から降ろされたのは幼い頃だから、船乗りだったころは飲酒は厳禁のはずだが、海賊コルセアがそれを真つ当に守っているとも思えない。船上なら自警団も政府の目も届かないからだ。

昨晚、未成年（ラヴェリの成人年齢は十八歳）のクラウゼやコーディにも酒を勧めていたところを見ると、やはりイライザには「お酒は十八になってから!」という認識がないようだ。

「弱くはないみたいなんですが……それよりも呑んだ後がアレですから……」

「あはは……」

レンリは喝いた笑いを漏らす。あの暴拳を思いだし、笑いたくても笑えない。

「……でも、なんでお姉さんはイライザさんを船から放り出したんですか？」

「酒に酔った勢い、らしいです……」

「あは……は……」

やはり笑えない。

「放り出された後は、港町で踊り子として働いていたらしいですよ」
「顔もスタイルもいいですもんね」

「ええ。それを買われたのだとか。それでお金を貯めた後、学園に入学して卒業し、ギルドを立ち上げたのだそうです」

細腕には似合わない大剣を使うのも、踊り子時代に小道具として頻繁に大剣を扱っていたからだそうだ。踊りの小道具ともなれば、実際の剣よりはかなり軽く作られているだろうが、それが一番手に馴染んだらしい。

「ところで、イライザさんのお姉さんの名前って何なんですか？」

レンリにとっては何気ない質問のつもりだった。

「『エルゼ』さんです」

「え……？」

エルゼ。

その名前の響きに、レンリは心当たりがあった。

『私もあの戦いに参加したわ。リーゼとエルっていう親友二人とね。そして、私とエルは生き残った。でも、リーゼは……』

ユステがあの日言った言葉。その中に「エル」という名前があった。

（そんなわけない、そんなわけない……！）

ユステの親友というからには、その「リーゼとエル」という二人は、彼女と歳も近いだろう。だが、イライザもユステと同じ年ぐらいいに見える。エルゼは彼女の姉なのだから、当然ユステよりも年上のはずだ。

それに、「エル」は死霊術師^{ネクロマンサー}、エルゼはおそらく海賊^{コルセア}だ。

それでも、もしかしたら、と思ってしまう。

「……そんなわけないだろう」

膝に乗っていたトトが呟いた。心の中を覗かれたようで、その声にどきっとする。

コーディに聞かれるのが嫌で、レンリはトトを連れて無言で部屋を飛び出した。

「トトはエルって人、知ってるの？ 確か記憶を失う前の私、六年前の私と一緒に、魔族の本拠地のハルヴァラに乗り込んだ人なんだよね？ そこにトトも居たんだよね？」

「……知っている。だが、詳しく話すつもりはない」

「そっか……」

コーディは追ってこなかった。トイレとでも勘違いしたのかも知れない。

しかし、いきなり飛び出てきたのはやはり失礼だったろうと、レンリは部屋に戻ろうとしたが、その前にトトがレンリの顔を見上げて言った。

「名前と言えましょう一つ。気付かんか？」
「何を？」

妙に勿体振って、トトはこう言った。

「パルミラ、イルミネ、ソルミナ。ま、偶然かもしれんがな」

020：裏を見た日（前書き）

☆お知らせとお礼☆

お気づきの方もいらっしゃると思いますが、下に貼ってある「アルファポリスランキングバナー」が九月より「ファンタジー大賞」仕様になってます。「異世界ラヴェリの召喚士」も「第四回ファンタジー小説大賞」に参加しますので、よろしければ投票をお願いします。

※※※※※

お気に入り登録がついに100件を超えました！

読んで下さっている皆さん、本当に本当にありがとうございます！

020：裏を見た日

※※※※※

「どうかしましたか？」

「わあああああっ!？」

不意に後ろから声が掛かった。

急に部屋を飛び出したレンリを心配して、コーディが追って来たのだ。

「え……どうしました？」

「い、いえいえいえいえ! 何でもないんですっ! 本当につ!」

やましいことは何もないが、こそそと会話していたことがどこか後ろめたい。コーディは怪訝な表情を浮かべたが、特に疑おうとはしなかった。

「あ、それより、リンチェが起きましたよ」

「本当ですか? ……あの、部屋空けてきて大丈夫ですか?」

リンチェにとって、ここは敵の本拠地のようなものだ。窓も開け放してあったし、放っておいたらすぐに逃げるだろう。

だが、コーディはポケットから数枚の札を取り出した。

「これ、^{ブリスト}司祭に描いてもらった施錠用の札なんです。これん扉に外側から貼ってききましたから大丈夫です。窓にも隣の部屋から外側に貼ってききましたし」

プリースト

司祭は回復職の中でも、結界や障壁でダメージを遮断するのを得意とする職業だ。

しかしそのとき。

廊下の端の部屋から、何かで扉を破ろうとする音が聞こえてきた。

「あー……あの札は、あくまで施錠専用ですから、戻った方がいいかもしれません……」

「同感です……」

あの勢いでは、おそらく扉ごと破壊しようとしているのだろう。部屋には埃を被った椅子もあったことだし、それを叩き付けているのかもしれない。

案の定、札を破って扉を開けると、リンチェが椅子を振り上げたところだった。

「ストップ！」

「あ……」

突然開いた扉に驚いて固まっていたリンチェだが、さすがに敵の本陣で騒ぎを起こす気はないらしく（扉を破ろうとしていた時点で結構な騒ぎだが）、大人しく振り上げた椅子を下ろした。よく見れば椅子は脚が一本取れている。

「ア……アンタたち！ さっさとアタシをここから出しなさいよ！」

小声で叫んで無理矢理部屋から出ようとするリンチェを押し戻し、コーディは再び扉に札を貼った。リンチェにはすぐに破られてしま

うだろうが、これで誰かが入ってくる心配はなくなる。

「まあまあ、落ち着いて」

「敵の懷で落ち着けるわけないでしょうが！」

「それでも暴れるのはみつともないぞ」

「ほ、ほっときなさいよ！　ぬいぐるみ風情が！」

トトに背中を蹴飛ばされたことがあるリンチェは、彼を苦々しく睨みつける。

「……アタシにはこんなところで休んでる時間なんてないんだから……」

「どういう意味？　……盗みに行くってこと？　昼ご飯くらいなら奢るけど……」

そろそろお腹が空く時間。通りにはたくさんの飲食店があるし、結局銀行に所持金を預け損ねたレンリは、持ち合わせはそこそこある。

だが、リンチェはキツとレンリを睨んだ。

「違うわよ！　何も分かってないお子様が、知ったような口を聞かないで！」

「え……？　あ、他の子供の分もってこと……？」

「違う！　違う違う違う……」

両手に顔を埋め、リンチェが力無くベッドに座り込んだ。

「どういうこと……？」

すっかり狼狽したレンリは、傍らに立っていたコーディに助けを

求めた。表情から判断すると、コーディは事情を知っているらしい。だが、よほど話し難い事情があるのか、コーディはすぐには口を開こうとしなかった。

「トト、分かる？」

「知らん」

もう一度コーディを見ると、彼は観念したように溜息を吐き、椅子に腰掛けた。

「……さっき、東の関所の自警団団長が『祭の代金』って言っていたの、覚えてますか？」

「え？ あ、ああ……『今年の祭だが、お前んとこの代金、まだ入ってない』って……」

「リンチェが盗みを働いているのは、主にその『祭の代金』を稼ぐためなんです」

「祭って……何のお祭りなんですか？ 出店でもするとか……？」

到底それは有り得ないのだが、他に祭のために金が必要となる理由が思いつかない。それだって、自警団に追い回されてまで参加するくらいなら、どこかに隠れていた方がましなはずだ。

すると、黙って聞いていたリンチェが顔を上げた。

「アンタって、ほんっとお気楽なのね！ アタシら身寄りも権力もない子供はね、領主に賄賂を送ないと、生贄にされちゃうんだから！」

「え……？」

生贄。華やかな祭のイメージにはとてもそぐわないその言葉に、

レンリとトトは凍りついた。

「知りませんか？ 街の北側に、ヘディン湖という湖があるんです。このアルネの街で使う水はすべてそこから引いているんですけど、そこに魔物が住んでいて……一年に一人、夏の終わりに生贄を差し出さないと、水を止められてしまうんです。祭はその生贄を差し出す儀式、祭りのことです」

「ヘディン湖……？ あ、『ヘディンの怪魚伝説』だ……！」

『ヘディンの怪魚伝説』。

それは「ラヴェリの神々」で最高ランクの難易度を誇ったクエストの名だ。通常、難易度の高いクエストは、広大なダンジョン（モンスターの出現率の高いエリア。洞窟や屋内である場合が多い）の奥に目的の人や物がある場合が多いが、ヘディン湖は林の中にあるただの湖で、周囲には特に強いモンスターがいるわけではない。むしろ中級プレーヤーなら湖までは苦勞せず辿り着けるほどだ。しかし、湖の中は上級プレーヤーでも手こずるほどのモンスターが蔓延っている。その中を泳いで湖底に向かわなければならず、全方向から攻撃が飛んで来るため、かなりの経験が必要とされた。レンリも自分が立ち上げたギルドの最高メンバーで挑み、四回目にやっとクリアしたほどだ。

そして、そのクエストの内容というのが、湖の主「リヴァイアサン」にさらわれた生け贄の少女を助け出す、というもの。

リヴァイアサンは「ラヴェリの神々」でベヒモス、ジズと並んで「ラヴェリ史上最強」称される巨大な魚のモンスターだ。その巨大さと硬い鱗による防御力が「最強」の所以で、ゲームを遊び尽くした上級プレーヤーの「物足りない」という意見から、運営側が旧約聖書から引っ張ってきて作り出した化け物である。作ったのはいいのだが、運営が調子に乗ったのか「物足りない」という言葉に対抗

心を燃やしたのか異常に強くなってしまい、一時期はレベルを下げたこともあった。だが、クリアするプレーヤーもちらほら現れたことから結局元のレベルに戻っている。

クエストの説明ではたった一行「さらわれた生贄の少女」とされてた少女側にも、複雑な事情があるらしい。聞けば、生贄は毎年身寄りのない年頃の少女が選ばれるのだそうで、領主や自警団への袖の下次第では免れることもできるらしい。

リンチェはその金を集めているのだ。

「でも……そんなことって……」

「うちは賄賂は一切受け取っていませんが、仕方ないんです。水が止まってしまったら、街の全ての人が死んでしまいますから。もうすぐ生贄の少女狩りが行われます。その前に、他の生贄候補よりもたくさんの賄賂を送らなければ、リンチェは……」

アルネの街は周囲を高い壁で囲まれている。街自体が牢屋なのだ。

「……アタシにはたくさんの妹や弟がいる。隠れる場所も逃げられる場所もないし、死ぬわけにはいかないのよ」

「でも、一時的にどこかに隠れてれば……」

「無理よ。やつらしつこいもの。死臭を嗅ぎ付けるハエみたいに、絶対に見つけだされるわ」

「だったら、ここに隠れてたら？」

「無理です。犯罪者と関わりを持つことは大罪ですから。ソルミナさんやイライザさんに迷惑が掛かってしまいます。だから僕はこれまで、生贄狩り当日に、できるだけ妨害工作をしてきました。今年もそうするつもりです」

「コーディ……」

リンチェはそのことを知らなかったようだ。先程まで容赦なく斬り掛かろうとしていたくらいだから、当然と言えば当然である。

「でも……そんなの、おかしいよ……それじゃあ他の子が……」

リンチェが助かったとしても、他の少女が生贄にされる。その少女にも、守るべき仲間がいるかもしれないくて、自分自身の人生があるわけだ。

「じゃあアタシが食われろっての!？」

「違う! そんなこと言っていない!」

しかし、逃げ場のない籠の中で、絶対的権力者に逆らうわけにもいかない。最悪領主か自警団を倒すという手もあるが、そんなことができるとは思えないし、できたとしても上々の権力者に睨まれてしまう。それでは魔族を倒すどころか、トリアル学園入学さえ難しい。

しかし、三人が無言になっている中、レンリの腕の中にいたトトが、とんでもないことを言った。

「リヴァイアサンを倒してしまえばいいではないか」

021：断られた日

※※※※※

「……は？　今、何て言った？」

「だから、リヴァイアサンなど倒してしまえばよかろうにと言っておる」

腕の中で平然ととんでもないことを言っただけのトトの頭を、レインリはむんずと掴んだ。射抜かれた翼の付け根を痛がるが、そんなことは構わない。

「なに言ってるの！　それが無理だから……無理だからこうなってるんでしょうが！？」

「それはお前ら人間が内部で争っているからだだろうが。リヴァイアサンくらいなら、私と十人程度の強者がいれば十分だ。強者と言っても、イライザ程の力があれば事足りる」

「なんでイライザさんの実力がわかるわけ……？」

「私は曲がりなりにも魔物だぞ？　力には敏感なのだ。それにこの地方のリヴァイアサンは聞いたことがある。まだ稚魚という噂だ。」

「……お前らでも勝機はあるぞ？」

「ちよつと待ってください、生贄の風習はもう数百年も続いているんですよ？　稚魚のはずが……」

「魔物にとっては数百年など一瞬だ。特にリヴァイアサンのような大物にとっては」

トトはコーディとリンチェを見た。二人とも、トトが言い出した突拍子もない話を聞いて固まっている。

「……お前らのギルドだけで勝てる、とは言わぬが、自警団が団結すれば容易い話だ」

これに言葉を返したのは、レンリでもコーディでもリンチェでもなかった。

「それ、本当か？」

見れば、札を貼ってあったドアがいつの間にか開いていて、戸口にはクラウドが立っていた。

「ク、クラウドゼさ……ん……？」

どうやって破ったのか、ドアには無惨に切られた札が貼り付いている。が、クラウドが剣を鞘に収めたところを見ると、ドアの隙間から剣を差し込んで切ったのだろう。魔法戦士の彼なら造作もない。マジックウォリアー

「お前ら薄情だなー。俺、あの後しばらく役所前から動けなかったんだからな」

クラウドは肩から腹にかけて包帯を巻いており、それに上着を羽織った恰好をしている。血こそ包帯に滲んでいないが、動き方がどこかおかしく、彼が怪我を負っていることが十分見て取れた。

「あの……どこら変から聞いてたんですか？」

「んー……ちょい前くらいからかな？ あ、その猫女が椅子でドアを殴ってた音は食堂からでも聞こえてたぜ？ それが気になって上がってきて、しばらく盗み聞きしてた」

「大分前じゃないですかっ!？」

「あー……言葉の綾だ。気にすんな」

クラウゼは鞘をベルトごと外し、隅から引っ張ってきて座った。

「で？ リヴァイアサンを倒すんだって？ 神獣さんよ」

「小僧には頼んどらんぞ」

「わーってるって。要するに、ギルマスクラスの奴を集めればいいんだろ？ 俺ら下っ端は」

「そういうことだ」

だが、簡単に「イライゼクラス」と言えど、そうレベルの高い者がこの街にいるとは思えない。領主は必ず、反逆されても他を頼ればどうにかなる程度の戦力しか街に置かないはずだ。

ならば戦力を求めるは、実力が拮抗する同じギルドマスター同士。

東のギルドマスターの協力は絶望的だが、他の二つもそうだとはい限らない。

「北はともかく、南の関所のギルマスなら何とかなるかもしれないぜ。……まあ、うちのギルマスに負けず劣らずの性格してるがな」

「イライザさんに負けず劣らずって……」

ビールジョッキを片手に騒ぐ女性が頭に浮かぶ。

「まあ、何にせよ、うちのギルマスを通さなきゃろくに話しもできないだろうがな。……あ、通した方がこじれるかもしれないけど」

「まずはイライザさんからですか……」

レンリは頭に手をやる。

だが、いつまでもこうしてはいられない。見方によっては、リヴァイアサンよりも強力な敵と話すために、レンリはトトを連れて階

段を下りて行った。

※※※※※

「……で、リヴァイアサンを倒したいからオレに協力しろと？」

「そういうことになります」

二日酔いが抜けきっていないせいで、イライザは至って不機嫌だった。彼女の大剣は手が届く範囲にあるし、そうでなくともレンリやクラウゼを萎縮させるには、あの怪力だけで充分だ。いや、眼光だけでも怯んでしまうかもしれない。

「……あのなあ、いくら神獣を連れてるからといって、出会って一晩の小娘の提案する大博打に乗るわけがないだろう？」

「でも……自警団は街の人を守るんじゃないんですか？ 生贄にされる少女は住

人じゃないんですか？」

「そうとは言わんが……」

「この私が協力してやると言っておるのだぞ？ またとないチャンスではないか、小娘」

実際、イライザもこの話には大分惹かれているようだ。だが、何かが彼女を躊躇わせているらしい。

「……やっぱオレには無理だ」

「何でっすか!？」

これに噛み付くように反論したのは、クラウゼだった。

「正直、俺は領主や他の……特に東が好き勝手やってるのにはうん

ざりしてます。神獣がいるチャンスなんて滅多にあるもんじゃないっすよ」

「それは分かってる。だが……」

「だが、なんですか？」

いつも強気なイライザが、珍しく頭を抱えて机に突っ伏した。

「……もし、オレらがリヴァイアサンを倒しちまったら、どうなると思う？」

「どうって……この街はもっと良くなるんじゃない？」

「バカ。逆だ。真逆だよ」

「え……？」

イライザが顔を上げる。

「生贄を逃れるための賄賂は、領主や他の自警団にとって、良い収入源だ。その賄賂の原因となってるリヴァイアサンを取り除いちゃったら、あいつらが黙ってないだろうよ。うちみたいな零細ギルド、簡単に叩き潰されちまう」

「でも……だったら領主や東ごと……」

「やっぱりバカ。領主を殺せばオレらは大罪人だ。お上に目を付けられれば、どんなギルドだって一貫の終わりだ。……オレの姉貴のギルドがそうだった」

「……姉貴って……エルゼさん、ですか……？」

「ああ」

幼かったイライザを船から放り出したという姉、エルゼ。

「姉貴もギルマスだった。オレの……オレらのギルドよりももっと零細で、船乗りだったのに陸で仕事していた時期もあったくらいだ。

食べるのにも困ったときもある。姉貴のギルドは正規のものじゃなくて、はぐれものの寄せ集めだったからな」

「違法ギルドっすか……」

「ああ。だから仕事もろくに回って来やしない。国営ブランドじゃなかったから。食いっぱぐれたときは、皆で船上で固くなったパンをかじってたよ」

「だったらなんでわざわざ船に乗ってたんですか？　陸ならまだいくらか仕事があったんじゃないんですか？」

「お前も浅はかだな、妖精族エルフのひよっ子。船員のほとんどは海賊コルセアだった。海に出てなきゃ、オレらの真価は発揮できない。陸じゃどう頑張っても、他の職に劣っちゃうんだよ」

イライザはふっと溜め息をついて、視線を窓の外にやった。外には海を連想させる青い空が広がっている。しかし、窓枠で切り取られたそれは、ひどく窮屈なものに感じた。特にイライザにとっては。

「時々闇ルートで違法な仕事とか回って来るんだけどな、オレはまだガキだったし、戦力どころか足手まといだった。依頼者もこっちの足元見てるから、ハイリスクでも三日食ってくのがやっとだし。中には大手の国営ギルドの下請けを安くやらされたこともあった。もちろん違法だが、金にはなる。これっぽっちだがな。断れば二度と仕事は回って来ないし、下手なこと——違法行為をネタにした強請すり——なんてやれば、オレらは次の日には墓の下だったろうよ。……墓すらなかったかもな」

「ひどい……」

「世の中そんなもんさ」

レンリとは明らかに違う幼少期を送ったイライザ。レンリは他に言うべき言葉が見つからず、トトを抱く手に力を込めた。

「そのうちな、見つかったら断頭台か絞首台行きのヤバい仕事も来るようになるんだ。幻薬ファルマの密輸とかな」

幻薬ファルマとは幻覚作用を持った薬のこと。見た目は飴玉か宝石にそっくりだが、一度使ったら必ずやめられない強い中毒性と、二、三度の使用で廃人になる毒性を持っており、大陸中で使用、所持、運搬、製造など、一切関わるものが禁止されている。

「幻薬ファルマの密輸なんて、ばれたらその場で打ち首もんの大罪だ。でも、金にはなる。廃人ファルマが幻薬から抜け出せなくなるように、オレたちもあの仕事に嵌まった。でも、どこからか情報がお上に漏れてな、あるときついにオレらの違法ギルドに討伐命令が下っちまった。……しかも、追ってきた奴らは、昔オレらに下請けの違法な仕事を流していた大手ギルドだぜ？ 追っ手がかかったのに気付いたときにや、もう遅かった。姉貴はオレを酔った振りして追い出すように、船から降ろして隠すだけで精一杯だった。あのクソ姉貴……最後の最後で善人面しやがって……オレだって一船乗り（海賊）なんだから、死ぬ時くらい仲間と一緒に船の上で死なせろよ……」

イライザが乱暴に目を擦る。

「……ま、とにかく無理だ。オレは自警団である前に、『朱の羽根』のギルドマスターだ。オレにはこのギルドを守る義務がある」

「そうっすか……」

ここまでの事情を話されれば、これ以上リヴァイアサン討伐を推すこともできない。

レンリとクラウゼは、一旦コーディとリンチェの待つ階上に引き上げた。

022：びっくりの日

※※※※※

「そうですか……まあ、ある程度は予想でしたが」

「お前、知ってたのか？ ギルマスの話」

「前に酔い潰れたときに、それらしきことを呟いてましたから」

「じゃあ早く言えよ……」

階上にて。

頼りのイライザが望み薄しと分かり、四人（と一羽）は新たな策を練っていた。

「ギルマスクラスつっても、そうそう集まんねえよなあ……」

「ですよね。仮に集まったとしても、仲間割れがオチでしょうし……」

だからこそこの悪しき風習が続いてしまっているわけで。狡猾な領主の作戦勝ちだ。

が、このまま泣き寝入りというわけにもいかない。

「……東のあのギルマスがイライザさんと仲が悪いのは分かるとして、他の二人……南と北のギルマスはなんでイライザさんと仲悪いんですか？」

そういえば南北の自警団の情報は全く入っていないと思い出す。

「……南は、南の自警団のギルマス、ユニは、たぶん私怨です。お互いを憎み合っているというより、ユニが一方的にイライザさんを嫌

っているという感じですね。理由までは分かりませんが」
「ふーん……じゃあ、北は？」

すると、コーディとクラウドの二人は顔を見合わせた。何か事情があるらしい。

やがて気が進まない様子で、コーディが口を開いた。

「北は……謎なんです」

「謎？」

「ええ。正体不明の……ギルマスから構成人数、何から何まで謎。唯一、ギルマスの名がラステルで、ギルド名が『幽』ということは分かっているのですが……全員濃紺のローブに白い仮面を付けているので、人相も年齢も性別も、何から何まで分からないんです」
「え……」

このラヴェリがゲームだった時代には、ギルドメンバーの服装や髪型を統一していたギルドもあった。しかし、人相どころか性別も分からないほど格好を統一させるのは過剰過ぎる。それも、濃紺の装束に仮面では、自警団どころか不審者とも取られかねない。

不気味、というより異様だ。

「イライザさんの話によると、定例会議の際もほとんど発言せず、コミュニケーション手段も筆談のみだそうです」

「……かなり変わりもんだよなあ。町であいつらとすれ違うと、ぞわっとするもん」

先程から黙ったままのリンチェの手が、カタカタと震えている。

となると、望みがあるのは南の自警団のみ。私怨なら説得すれば

何とかなるかもしれないと、レンリはトトを連れて、クラウゼの案内の元、アルネの街の南部に向かうことにした。

※※※※※

西の関所から街に入ったレンリは特にそうとは意識しなかったが、この街の作りは東西南北でだいぶ違った表情をしている。

西部から南部へ向かうにつれ、街の景観にだいぶピンク色が混じるようになり、レンリもその事に気付いた。

「なんか……女の子っぽいというか……だいぶファンシーな街になってきましたね……」

道の両脇には色とりどりの花々。花屋や菓子店など「幼稚園の女の子が将来就きたい職業ベスト10」にランクインしていそうな店も目立つ。

「ここを取り仕切ってるのは女ばっかのギルドだからな。ここいらは女が幅利かせてんだ。カップルにはいいかもしれないけど、独り身の男とか、野郎ばっかで歩くの辛いつて不評だぜ」

「そりゃそうでしょうね……」

ショッキングピンク一色のパン屋に独り並ぶ中年男性がずいぶんと居心地悪そうにしている。かく言うレンリも、あまり「女の子らしい」性格ではない。自分が男だったら、絶対に住みたくないだろうな、と思った。

「あ、俺ちよつと用事あるから、この辺で待っててくれない？ 時間がかかないから」

「え？ 用事？」

「そ。剣の手入れ。この辺りに腕のいい職人がいるんだ。女だけど、かえって丁寧の仕事してくれるから、通の穴場になってる。色々揉め事が起きそうだからさ。万全の状態にしときたい」

クラウゼは腰に下げている剣を軽く叩いた。大して問題があるようには見えないが、定期的な手入れは必要なのだろう。そういえば自分は全く手入れをしていないなど、レンリは手に持つ杖^{ロッド}を見た。

「お茶するところには欠かないから、その辺で待つといってくれ。神獣さんもな」

「……言われんでもそうする」

傷を受けてから不機嫌なトトは、レンリの肩にしがみついたままむすつと答えた。

小走りに（逃げるように）クラウゼが立ち去った後、レンリとトトはピンクパラソルの目立つ喫茶店に座っていた。これでも比較的控えめな装飾の店を選んだつもりだが、居心地が悪い。整った髪型に、フリルやレースだらけの服を着た若い女性が店を埋める中、緩く一つにまとめただけの三つ編みに、枯れ草色の簡素なチュニツクという姿では、場違い感が否めない。

「ご注文は何になさいますか？」

注文を取りに来たウェイトレスまでピンクのいわゆる「メイド服」。現代日本だったらここはオタクの聖地だな、と暢気なことを考えながら、レンリは紅茶に似た飲み物と、トトの分も合わせたケーキ二つを注文した。

夏の盛りでありながら、高原に位置しているおかげで、爽やかな

風が人々の間を吹き抜けていく。だが、一見満ち足りたような顔を見せるこの街の裏に潜むものを考えると、ケーキをつつくフォークが止まった。

「……ねえ、本当にリヴァイアサン、倒せると思う？」

思い出した途端、急に背筋が寒くなって、レンリはケーキをかじるトトを見た。

「……正直なところ、分からん。私一人なら確実に無理だ。友軍と……お前次第だな」

「あたしはもう『エルヴァステイの救世主』じゃないからね」

「違う。記憶がないだけだ」

「……………」

記憶を無くす前の自分とは、いったいどのような性格で、どんな毎日を送っていたのだろうか。トトなら知っているだろうが、知るのがなぜか少し怖くて、聞くに聞けない。

虚無感に包まれたまま、ぼんやりと通りの向こうを眺めてみる。魔族進行やリヴァイアサンの事が信じられないくらい、穏やかで、華やで、幸せな街だ。たくさんの人が行き交い、道端で談笑している。花に水をやる女性や、老婆の手伝いか何かで大きな荷物を運んでいる少女も見られる。

何故自分なのだろう。

ここにいる自分はレンリだが「救世主」だったのはセンリだ。

しかし、どちらも高槻千里という人間だったことに変わりはない。で。

双子がいたら、きっとこんな気持ちなのだろうかと、思考が勝手に迷走を始める。とりあえずレンリは現実味を帯びない自問自答を中断した。

——いや、中断せざるをえなかった。

「てめえっ！ どこ見て歩いてやがんだ！」

通りの喧騒を破る怒鳴り声。

焦点を声の方に合わせると、視界に入っただのは風体の悪い男三人に、道に倒れる老婆と、彼女を庇うようにしている少女の姿。先程視界に入ってきた二人で、大きな荷物の麻袋は道に投げ出されていた。

「俺の服が汚れちゃっただろうがよー。どうしてくれんだあ？ ババア！」

……なんというか、絡み方が典型的なチンピラ。それもかなり低能な部類に入る。

見たところ、チンピラ三人と老婆がぶつかってしまったらしい。

「絵に描いたような言い掛かり」に腹が立ったレンリは、杖ロッドを持つて立ち上がった。

「何をする気だ？ まさか、仲裁か？」

「ううん、チンピラにちょっと痛い目見てもらう」

男たちは三人とも手に手に得物を持ってはいるが、どれも手入れを怠っているのか、状態があまりよくないのが遠目にも分かる。武器の状態はイコール持ち主の修練度。あの程度なら、召喚士サモナーとしてはまだまだ半人前のレンリでも楽勝だろう。

しかし、トトがそれを引き止めた。

「目立つことはやめておけ。お前の容姿はただでさえ目立つ」

「でも……」

「ああいう手合いは事を構える度胸もない。文句を言うだけ言ったらすぐ消える。虚勢を張っているだけだからな」

達観した口調で語るトト。だが、口の端にクリームを付けたままではいまいち説得力に欠ける。

けれども、事態は簡単には治まらなかった。

「謝りなさい」

レンリはすぐには声の出所が分からなかった。いや、彼女だけでなく、遠巻きに見ていた傍観者たちや、当事者の男たちでさえも耳を疑っただろう。

声の主は、老婆を庇っていた桃色の髪の少女だった。

「……はぁ？ 何だった？」

「謝りなさい、と言いました」

十歳か、九歳くらいに見える少女は、全く怯むことなく男の目を正面から睨みつける。一瞬男がたじろいだように見えたが、すぐに威勢を取り戻して、少女の胸倉を掴んだ。少女のピンクの靴が地面を離れ、大きな麻袋の荷物がドサリと落ちる。

「もういっぺん言ってみろや！ ガキが！」

「聞き取れませんでしたか？ この御老人に謝りなさい」

年齢に似つかわしくない口調で淡々と喋る少女に、遂に男が拳を振り上げた。

「やめとくれ！」

老人の悲鳴。

その刹那――

「ぐあっ!？」

殴打音に野太い呻き声。

そして、重たいものが地面に投げ出されるような音。

地面に倒れたのは、男の方だった。

「……ガキ、だなんて礼を失するにもほどがあります」

耳慣れない重厚な金属音がして、倒れた男から視線を外したレンリは、かなり異質な光景を見た。

――巨大な斧アックスを手にした少女。

少女の手には、空になった麻袋が握られている。

「て、てめえ、なにもんだ!？」

残り二人の問い掛けに、少女は桃色の髪を揺らして笑顔で答えた。

「南の自警団団長、高位妖精族ハイエルフのユニといいます。……あなたたち。
この御老人に今すぐ謝罪しないと、叩き斬りますよ?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4255v/>

異世界ラヴェリの召喚士

2011年11月12日03時07分発行